純正國語讀本

五十嵐力編

巻九

3759
I81
資料室

42049
教科書文庫
4
810
41-1933
200030
2353

昭和八年二月二十一日　中學校國語漢文科用
昭和八年九月一日　實業學校國語科用

文部省檢定濟

文學博士 藤岡勝二 著

新編 國語讀本

東京 開成館

資料室

375.9
Ig1

群魚の圖（伊藤若冲筆）

（一三百魚の譜參照）

廣島大學圖書之印

広島大学教図書
38640

伊藤若冲

伊藤若冲は德川時代中期の畫家で、京都の人である。名は汝鈞、字は景和、若冲は號で、又斗米庵とも號した。青物問屋の主人で、幼より畫を好み、初め狩野派を學び、後に元明の古法を模し、又光琳の筆意をも混じて一派の畫風を開いた。人物山水花卉鳥獸、何れをもよくしたが、殊に鷄に巧みであつた。從つて鷄の畫を乞ふもの門前市をなす有樣で、彼れは米一斗を謝禮として、書き與へることにしてゐたので、遂に斗米庵の別號を生むに至つたのである。寛政十二年八十九歳の高齡を以つて永眠。京都相國寺に葬つた。

この群魚の圖は三十幅一組の大幅なる宮中御物の一である。

純正國語讀本 卷九

目次

一 勅語……一
二 寶祚無窮……平木白星……三
三 古文學に現はれたる祖先の面影……七
四 山路を登りながら……夏目漱石……一三
五 榛名山……一八
村上鬼城——高濱虛子——河東碧梧桐
六 落花の雪……（太平記）……二一
七 東下り……（伊勢物語）……二六
八 火鼠の皮衣……（竹取物語）……三一

九 山岳美論……吉江喬松……三七
一〇 隅田川……世阿彌……四八
一一 橘曙覽の歌……正岡子規……五七
一二 白帝城……七〇
一三 百魚譜……横井也有……八三
一四 新島守……（增鏡）……八七
一五 明治以前の我が繪畫……藤岡作太郎……九六
一六 小原御幸……（平家物語）……一〇二
一七 芳宜園大人の靈を祭る……村田春海……一一〇
一八 世界の四聖 その一……高山林次郎……一二四
一九 世界の四聖 その二……高山林次郎……一三三
二〇 船旅……（土佐日記）……一二九

二一 現代の文學……千葉龜雄……一三六
二二 待問……橘守部……一四九
二三 模範國民の養成 その一……高田早苗（講演）……一五五
二四 模範國民の養成 その二……高田早苗（講演）……一六四

目次終

廣島大學圖書之印

純正國語讀本　卷九

一　勅語

勅語
昭和元年十二月二十八日踐祚後朝見式に賜はりたるもの

統治ノ大權ヲ總攬ス
舊章ニ率由シ先德ヲ聿修ス
叡聖文武ノ資
夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス
皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カランコトヲ庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ內文敎ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル

御即位禮に際し黄櫨染の御袍を召させられたる

進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ

唯兢業トシテ負荷ノ重キニ任ヘサランコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ擧國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ニ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ

今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘキ所ナリ

夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徵ニ

シ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事ヲ奬順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

二　寶祚無窮

平木白星

皇祖天照らす日の大神
瓊々杵尊に言依したまはく、
「豐葦原千五百秋瑞穗の國は
我が子孫の王たるべき地なり、
宜しく爾就きて治らせよ、
寶祚の隆えまさんこと

平木白星
詩人
名は照雄
千葉縣の人
大正四年歿
年四十

神問はしに問はし給ひ、神掃ひに掃ひ給ふ。

當に天壤と與に窮みなからん。」

こゝをもちて、
荒ぶる神を神問はしに問はし給ひ、
神掃ひに掃ひたまひ、
高天原に宮柱太しき立てゝ、

我が天皇
大正天皇の御事

慶を積み暉を重ね、
建國以來百二十三代、
叡聖文武の我が天皇、

生日の足日

今日を生日の足日として、
高知らせ給ふ高御座、
萬方に勅して宣はく、
「朕今丕績を纘ぎ遺範に遵び

磐石の安きを圖る。

內は邦基を固くして
永く磐石の安きを圖り、
外は國交を敦くして
ともに和平の慶に賴らんとす。」
天子大寶の位に卽かせ給ふ、
祝へよや。
天に繼ぎて極を建て、
乾坤を統ぶるまつりごと、
言賀げよ。
列邦朝し、元々仰ぎ、
明德を明らかになし給ふ、
慶べよ。

鏡の如く明らかなるをもちて照臨し、
正しき大道こゝにひらけ、
神劍を提げて荒ぶるものを和し、
威ある平和こゝにうまれ、
八坂瓊のひろがれるが如く四方を治らし、
新らしき文明こゝに成らん。

現神わが大君の大御稜威、
いやあらたにいや嚴かしく、
天地のむた萬千秋の長五百秋に、
とこしへかはらぬ御代の榮えを。
祝へやうたへや、常磐堅磐に
君萬歳と祝へや。

天地のむた萬千秋の長五百秋に。

祝詞を見ると、我が國民が罪穢れを忌んだ事、清きを愛した事、直きを愛した事、神を敬つた事、平和を愛した事が解る。記紀の歌を見ると、積極的に光明を追うて進んだことが明らかに看取される。

三　古文學に現はれた祖先の面影

奈良朝以前のおもなる文學は『古事記』『日本紀』の中に在る百八十餘首の歌と『延喜式』の中にある祝詞とである。祝詞は神に祈る詞であるが、之れを見ると、我が國民が罪穢れを忌んだ事、清きを愛した事、直きを愛した事、神を敬つた事、平和を愛した事が解る。また記紀の歌を見ると、我々の祖先が生々發展を理想として、積極的に光明を追うて進んだことが明らかに看取される。例へば日本武尊の御臨終の御歌に、かういふのがある。

いのちの　全けむ人は、たゝみこも　平群の山の、
隱白檮が葉を　うづに挿せ、その子。

是れは、尊が伊勢の能褒野で薨りたまふ時に、遙かに故郷の大和

を思ひやつて歌はれたので、「思國歌」と呼ばれてゐるものである。大意は、「自分は今、病のために、旅の空に淋しく果てるのであるが、それにつけても故郷の汝等を思ふの情に堪へぬ。あはれ、故郷の命全く身の健かならん人達よ、昔わが汝等と共に、取つて、かざして、遊び樂しんだ、あの平群の山の熊樫の葉を、髪にかざして樂しく遊べよかし、我が愛らしき故郷人よ。」といふこゝろであらう。旅路に惱み死に臨んで故郷を偲ぶは、人情の自然で、珍しくもないが、邪神の毒氣に中たり、恐ろしき苦悶を重ねて死ぬる間際に、「遙かなる故郷人に寄語す、命全き人は平群の樫をかざし、陽氣に遊んで、人生を樂しめよかし。」は、どうであらう。此の樂天的、積極的、向上的、光明的な、減り目の見えない氣象は、有難いものではないか。此の有難い氣象、日本民族の積極的光明性が、佛教などの感化によつて濕つぽく陰性化、消極化されたのは殘念なことである。日本武尊はいろ

日本武尊はいろいろの點に於いて、大和民族の固有性を備へられた御方であつた。

東西の兇賊を手もなく平らげる。

いろの點に於いて、大和民族の固有性を備へられた御方であつた。性質は極めて聰明で、そして武勇は絶倫であつた。熱すれば矢も楯もたまらぬといふ多血性であるが、それで居て、君父の命にはおとなしく從ふといふ優しい所があつた。東西の兇賊を手もなく平らげる武勇があつて、それで姿は女裝すれば川上梟帥を見惚れさせる美容があつた。人を信じて群がる夷の間に直往して火攻めに逢はれる。劍で其の火を薙ぎ返して夷を鏖殺にされる。伊勢では、熊襲をやうやく平らげて歸つたばかりの自分に、すぐさま蝦夷征伐の勅命のあるのは、父帝が私に死ねかしの御心であらうかと、叔母君に歎かれたが、やがて涙ををさめ、進んで夷を平らげられる。そして死なうといふ間際に、健かな人達は遊べよ樂しめよと勸められる。このいろ〳〵な積極的性質の面白く調和したる所、實に民族の模範ともすべき立派な愉快な性格ではなからうか。

『古事記』と『萬葉集』とは、ともに昔の民族の純なる面影を見るべき古文學の寶典である。

つぎに奈良朝の文學を代表すべき作物は『古事記』と『萬葉集』とである。『古事記』は神代の大昔から推古天皇に至るまでの言傳を筆記したもの、『萬葉集』は柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴旅人、大伴家持等、奈良朝の歌人の作を中心とした上代の歌集である。そして二つともに昔の日本民族の純なる面影を見るべき古文學の寶典である。左に古事記の趣を示す例として、須佐之男命が高天の原に上られた時に、天照大御神が命を待ちつけて詰問される一節を引いて見よう。

山川悉に動み、國土皆震りき。こゝに天照大御神聞き驚かして、我が那勢の命の上り來ます由は、必ず善はしき心ならじ、我が國を奪はむと欲すにこそと詔り給ひて、即ち御髮を解き、御角髮に纏かして、左右の御角髮にも、御髻にも、左右の御手にも、各八尺の勾瓊の五百津の美須麻流の珠を纏き持たして、背には千入の靫を負ひ、比良には五百入の靫を附け、またいつの竹鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てゝ、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪なす蹶散かして、いつの男建び蹈み建びて、待ち問ひ給はく、何故上り來ませると問ひ給ひき。

恐ろしい權幕で上つて來た。

大意は「須佐之男命は山川國土を震り動かして、天照大御神御領の高天の原に上つて來られた。大神は聞召し、驚かせられて、弟の命が恐ろしい權幕で上つて來たのは、きつと善意のためではあるまい、察するに我が國を奪はうの下心であらうと仰せられて、早速凛々しき男裝に改めさせられ、髮を解いて角髮に結び、左右の御角髮にも、御髻にも、左右の御手にも、玲瓏燦爛たる勾玉を緒に通したのを纏うて、輝くばかりに裝はせられた。なほ武器には千本入、五百本入の靫を御身の前後に付け、左の臂には立派な鞆を佩び、弓腹を振り立てつゝ、堅き庭に向股まで蹈みぬかるばかり、力足を蹈ん

玲瓏燦爛。

張り、土くれをば沫雪の如く蹶散らかして、御稜威あたりを拂ふ御武者ぶるひゆゝしく、威丈高に立ちはだかつて、命の見えるのを待ちつけて、何故の入國ぞと問はせられた。」といふことである。

土から掘り出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しい美しさとが、いかにも微妙に調和して居るではないか。天照大御神の氣高い勇ましい神々しい御姿が雄壯剛健なる大文字のうちに躍動して居るではないか。

我等の祖先の面影の古文學に見えた趣は、まづざつとこんなものであつた。

土から掘り出したやうなうぶな趣と、鐵のやうな強い力と、花のやうな優しさとが、いかにも微妙に調和してゐる。

夏目漱石
文學者
名は金之助
東京の人
大正五年歿
年五十

四　山路を登りながら

夏目漱石

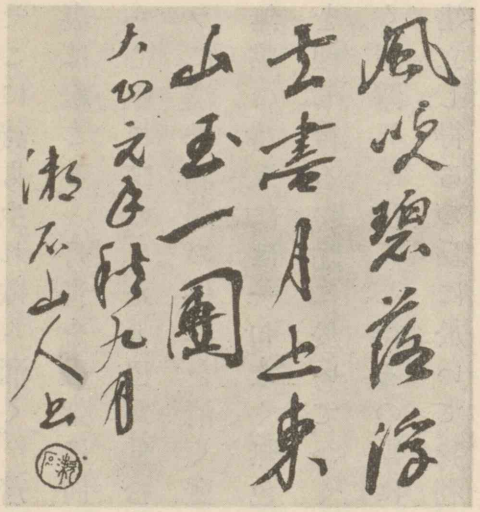
山路を登りながら、かう考へた。

風吹碧落浮雲盡、月上東山玉一圍

大正元年秋九月
漱石山人書

あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

智に働けば角が立つ、情に棹させば流される、意地を通せば窮屈だ、とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安いところへ引越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、畫が出來る。



夏目漱石筆蹟

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくいところをどれほどか寛容げで、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引き拔いて、有難い世界を

まのあたりに寫すのが詩である、畫である。あるは音樂と彫刻である。細かにいへば寫さないでもよい、たゞ眼のあたりに見れば、そこに詩も生れ歌も涌く。着想を紙に落さずとも、瑠璃の音は胸裏に起こる。丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。たゞ己が住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗らかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得るの點に於いて、かく煩惱を解脱し得るの點に於いて、かく清淨界に出入し得るの點に於いて、またこの不同不二の乾坤を建立し得るの點に於いて、我利、私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於いて、千金の子よりも、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見下ろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞こえる。

着想を紙に落さずとも、瑠璃の音は胸裏に起こる。丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗らかに收め得る。

せつせとせはしく絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてゐたゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴き盡くし、鳴き明かし、また鳴き暮らさねば氣が濟まんと見える。その上どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて、漂うてゐるうちに、形は消えて無くなつて、たゞ聲だけが空のうちに殘るのかも知れない。

春は眠くなる。猫は鼠を捕ることを忘れ、人間は借金のあることを忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて正體なくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものの中で、あれ

方幾里の空氣が一面に蚤に刺されてゐたゝまれないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。

ほど元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェレーの雲雀の詩を思ひ出して、口の内で、覺えたところだけ諳誦して見たが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。その二三句の中にこんなのがある。

前を見ては、後へを見ては、物欲しと、あこがるゝかな我れ。
腹からの、笑ひといへど、苦しみの、そこにあるべし。
美しき、極みの歌に、悲しさの、極みの想、籠もるとぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひ切つて、一心不亂に、前後を忘却して我が喜びを歌ふわけには行くまい。

少時は路が平で、右は雜木山、左は菜の花の見つゞけである。足の下に時々蒲公英を踏みつける。鋸のやうな葉が遠慮なく四方へのして、眞中に黄色な珠を擁護してゐる。菜の花に氣を取られて、踏みつけた後で、氣の毒なことをしたと振り向いて見ると、黄色な珠は依然として鋸のなかに鎭座してゐる。暢氣なものだ。

また考へを續ける。

西洋の詩は無論のこと、支那の詩にもよく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂へはつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見てもたゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。蒲公英もその通り、櫻も――櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで別段の苦しみも起こらぬ。起こるとすれば、足が草臥れてうまいものが食べられぬ位の事だらう。

然し苦しみのないのは何故だらう。たゞこの景物を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以

Percy Bysshe Shelley (1792—1822) イギリスの詩人

一心不亂に我が喜びを歌ふ。

詩人に憂へはつきものかも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。

上は、地面を貫つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する了見も起こらぬ。たゞこの景色が――腹の足しにもならぬ、月給の補ひにもならぬこの景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴はないのだらう。自然の力はこに於いて尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしむるのは自然である。

（『草枕』）

吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩興に入らしむるのは自然である。

村上鬼城
俳人
上州の人

五　榛名山

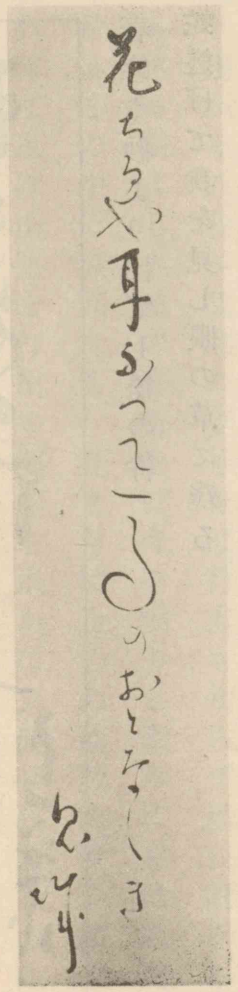
村上鬼城

榛名山大霞して眞晝かな
松立てゝゆゝしき門となりにけり
生きかはり死にかはりして打つ田かな
壁にかけて二梃の鍬の飾かな

花散るや耳ふつて
馬のおとなしき
鬼城

高濱虛子
俳人、小說家
名は清
伊豫松山の人
明治七年生

雀子の大きな口をあきにけり
船ばたに並んで兄鵜弟鵜かな
大蜘蛛の虛空を渡る木の間かな
虫賣の虫のかず〳〵申しけり
石灰を秋海棠にかくるなよ



鬼城筆蹟

道あるに雪の中行く童かな
埋火や思ひ出ること皆詩なり

高濱　虛子

寒燈に柱も細る思ひかな
大空に又わき出でし小鳥かな

虚子筆蹟

春寒や砂より出でし松の幹
蛇逃げて我を見し眼の草に残る

春雨や諸國荷船の苫の數
背に近くもたれ心や春の山
長閑なる水暮れて湖水灯ともれる
蟹とれば蝦も手に飛ぶ涼しさよ

河東碧梧桐

青き色の殘りて寒き干菜哉　虚子

河東碧梧桐
俳人
名は秉五郎
伊豫松山の人
明治五年生

交野の春
藤原俊成
またやみむ交野の御野の櫻がり花の露ちる春の曙（新古今集）

紅葉の錦
藤原公任
朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき（拾遺集）

逢坂の關
紀貫之
あふ坂の關の清水にかげ見えて今やひくらん望月の駒（拾遺集）

うね野
近江より朝立ちくればうねの野

六　落花の雪

（太　平　記）

落花の雪に踏み迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を衣て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明かす程だにも、旅寢となれば物憂きに、恩愛の契り淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住み馴れし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀れなる。　憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、すゑは山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならす、勢多の長橋うち渡り、行きかふ人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり。　時雨もいたく森山の、木の下露に袖濡れて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありと

にたづぞなくなるあけぬこの夜は（古今集）

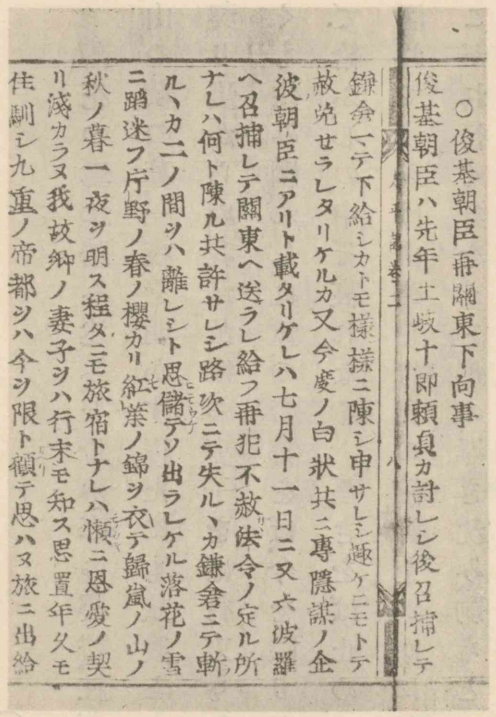
時雨もいたく
紀貫之
白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり（古今集）

鏡山
大伴黑主
鏡山いざ立ちよりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると（古今集）

汐干に今や
藤原秀能
さよ千鳥聲こそ近くなるみ潟傾く月に潮やみつらむ（新古今集）

ても、涙に曇りて見えわかず、ものを思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。

番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れはてゝ、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰れかあはれと夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に着き給ふ。


○俊基朝臣再關東下向事
俊基朝臣ハ先年土岐十郎頼員カ討レシ後召捕レテ
錄參ニテ下給シカトモ樣樣ニ陳シ申サレシ趣ケニモトテ
赦免セラレタリケルカ又今度ノ白狀共ニ專隱謀ノ企
彼朝臣ニアリト載タリケレハ七月十一日ニ又六波羅
ヘ召捕レテ關東ヘ送ラレ給フ再犯不赦法令ノ定ル所
ナレハ何ト陳ル共許サレシ路次ニテ失ルヽカ鎌倉ニテ斬
ルヽカ二ノ間ノハ離レシト思儲テソ出ラレケル落花ノ雪
ニ踏迷フ庁野ノ春ノ櫻カリ紅葉ノ錦ヲ衣テ歸嵐ノ山ノ
秋ノ暮一夜ヲ明ス程タニモ旅宿トナレハ懶ニ恩愛ノ契
リ淺カラヌ我故郷ノ妻子ヲハ行末モ知ス思置年久モ
住馴シ九重ノ帝都ヲハ今ヲ限ト顧テ思ハヌ旅ニ出給

慶長十年に刊行された木製活字の太平記

鶏鳴曉を催し、
匹馬風に嘶ゆ。

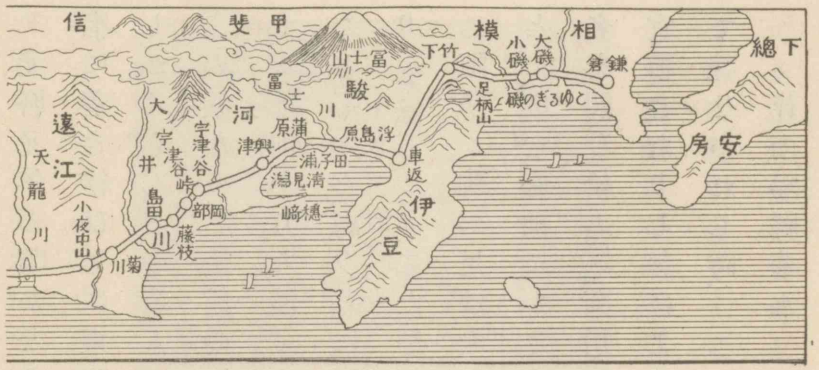
命なりけり
西行法師
年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山（新古今集）

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の、東夷の爲めに捕はれて、この宿に着き給ひしに、東路の丹生の小屋のいぶせきに、古郷いかに戀しかるらんと、さる人の讀み慰めたりし、その古の哀れ迄も、思ひ殘さぬ涙なり。　旅館の燈幽かにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍河をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そこともも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が、命なりけり。」と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。

隙ゆく駒の足はやみ、日すでに亭午に昇れば餉まゐらするほどとて、輿を庭前にかき止む。　轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり。」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣ノ菊水
汲ニ下流ヲ而延ニ齢ヲ

龜山殿
京都の西郊、嵯峨にある龜山の離宮



今東海道ノ菊川宿ニ西岸ニ而終レ命フ

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとどまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

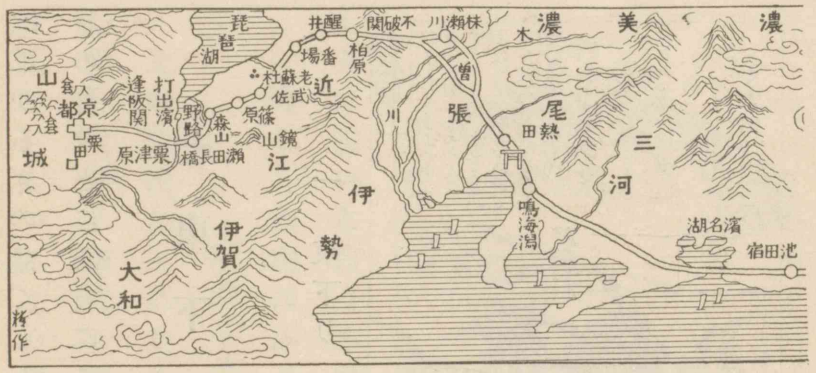
古もかゝるためしを菊川の
おなじ流れに身をや沈めん

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛り、龍頭鷁首の舟に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛裏枯れて、もの悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆ

夢にも人に
駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり
（伊勢物語）

富士の高嶺
藤原家隆
富士の根の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり
（新古今集）



けば、蔦、楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の、住所を求むとて、東の方に下るとて、夢にも人にあはぬなりけりと詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原うち過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き舟浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮世をめぐる車返し、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯小磯見おろして、袖にも波

七月二十六日
元弘元年

はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數積もれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

七　東下り

一　東下り

（伊勢物語）

行き〳〵て駿河の國にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らんとする道はいと暗う細きに、蔦かづらはしげりてもの心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者逢ひたり。かゝる道にはいかでかおはす

すゞろなるめを見る。

かゝる道には

かでかおはするといふに、見れば見し人なりけり。

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、形は鹽尻のやうに

もりに雪いと白うふれり。

時しらぬ山はふじのねいつとてか
かのこまだらに雪のふるらん

その山は、こゝにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらん程して、形は鹽尻のやうになんありける。なほ行き〳〵て、武藏の國としもつふさの國との中に、いと大きなる川あり。それを隅

るといふに、見れば見し人なりけり。京にその人のもとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山べのうつゝにも夢にも人のあはぬなりけり

ふじの山を見れば、五月のつご

なんありける。

田川といふ。其の川の邊に群れ居て、思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、はや船にのれ、日も暮れなんといふに、乘りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き鳥の、嘴と脚と赤き、鳴の大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず。渡守に問ひければ、これなんみやこ鳥といふを聞きて、

名にしおはゞいざ言問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

二　小野の深雪

惟喬親王　文德天皇第一の皇子御母は紀靜子といひ右兵衞名虎の女

昔水無瀨にかよひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします。御供に馬頭なる翁つかうまつれり。日頃へて宮に歸りたまひけり。御送りして、とくいなんと思ふに、大御酒たまひ、祿たまはんと

水無瀨　攝津國三島郡島本村

つれ〴〵といとものがなしくておはします。

さても侍ひてしがな。

てつかはさゞりけり。此の馬頭心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶこともせじ
秋の夜とだにたのまれなくに

とよみける。時は彌生のつごもりなりけり。親王大殿籠らでありかしたまひてけり。かくしつゝまうでつかうまつりけるを、思ひの外に御髮おろさせ給ひて、小野といふ所にすみ給ひけり。正月にをがみ奉らんとてまうでたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室にまうでてをがみ奉るに、つれ〴〵といとものがなしくておはしましければ、やゝ久しく侍ひて、古の事など思ひ出でて聞こえさせけり。さてもさむらひてしがなと思へど、おほやけ事どもありければ、えさむらはで、夕暮に歸るとて、

わすれては夢かとぞ思ふおもひきや
雪ふみわけて君を見んとは

とよみて、泣く〳〵歸りにけり。

三　さらぬわかれ

昔男ありけり。身は賤しながら、母なむみこなりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しば〳〵もえまうでず、ひとり子にさへありければ、いと愛しうし給ひけり。さるほどに十二月ばかりに、とみの事とて御文あり。驚きて見れば、他事はなくて、

老いぬればさらぬ別れのありといへば
いよ〳〵見まくほしき君かな

となんありける。これを見て、馬にも乘りあへずまゐるとて、いたううち泣きて、道すがら思ひける。

世の中にさらぬわかれのなくもがな
千代もといのる人の子のため

母　業平の母のみこ　桓武天皇の第八皇女にて伊登内親王と申す。

さらぬわかれのなくもがな。

四　河原の院

むかし左の大臣いまそかりけり。賀茂川のほとり六條わたりに、家をいと面白く造りて住みたまひけり。十月のつごもりがた、菊の花うつろへる盛り、紅葉の千種に見ゆるをり、親王だちおはしまさせて、夜ひと夜酒飲みし遊びて、夜明けもてゆくほどに、この殿の面白きをほむる歌よむ。そこにありけるかたゐ翁、板敷の下にはひありきて、人に皆よませ果てゝ詠める。

鹽竈にいつか來にけむ朝なぎに
つりする船はこゝに寄らなむ。

となむよみける。

みちの國にいきたりけるに、怪しくおもしろき所々多かりけり。わが帝六十餘國のなかに、鹽竈といふ所に似たる所なかりけり。

菊の花うつろへる盛り、紅葉の千種に見ゆるをり、

板敷の下にはひありきて、人に皆よませ果てゝよめる。

されば、なむ、かの翁更にこゝをめでて、鹽竈にいつか來にけむとは詠めりける。

八　火鼠の皮衣

（竹取物語）

右大臣阿倍御主人は財ゆたかに家廣き人にぞおはしける。その年わたりける唐船の王卿といふもののもとに、文を書きて、火鼠の皮ごろもといふなるもの買ひておこせよとて、仕うまつる人の中に、心たしかなるを選びて、小野房守といふ人をつけて遣はす。持ていたりて、かの浦に居る王卿に黃金を取らす。王卿文をひろげて見て、返事かく。

「火鼠の皮ごろも我が國には無きものなり。音には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にある物ならば、この國にも持てまうで來なまし。いと難きあきなひなり。しかれども若し天竺に、たまさかに持てわたりなば、若し長者のあたりにとぶらひ求めむに、無きものならば、使にそへて黃金返したてまつらむ。」

といへり。

かのもろこし船來けり。小野房守まうで來て、まう上るといふことを聞きて、歩み疾うする馬をもちて、走らせ迎へさせ給ふ。時に馬に乘りて、筑紫よりたゞ七日にまうで來たり。文を見るに、いはく、

「火鼠の皮衣、辛うじて人を出だして、求めて奉る。今の世にも昔の世にも、この皮はたやすく無きものなりけり。昔かしこき天竺のひじり、此の國にもて渡りて侍りける。西の山寺にありと聞き及びて、公に申して、辛うじて買ひ取りて奉る。價

の黄金少なしと、國司使に申しゝかば、王卿が物加へて買ひたり。いま黄金五十兩賜はるべし。若し黄金賜はぬものならば、皮衣の質返したべ。」

といへる事を見て、

「何おほす。いま黄金少しの事にこそあんなれ。必ず送るべきものにこそあんなれ。嬉しくしておこせたるものかな」

とて、唐土の方に向ひて伏し拜みたまふ。この皮衣入れたる箱を見れば、くさ〴〵の麗はしき瑠璃をいろへて作れり。皮衣を見れば紺青の色なり。毛の末には黄金の光輝きたり。むべかぐや姫の好もしがり給ふにこそありけれと宣ひて、あなかしことて、箱に入れたまひて、物の枝につけて、御身の假粧いといたくして、やがて泊りなむものぞと思して、歌よみ加へて、持ちていましたり。その歌は、

かぎりなきおもひに焼けぬ皮ごろも
　　袂かわきて今日こそは見め。

といへり。家の門にもていたりて立てり。竹取出で來て取り入れて、かぐや姫に見す。かぐや姫かの皮ごろもを見ていはく、「うるはしき皮なんめり。わきてまことの皮ならむとも知らず。」竹取答へていはく、「とまれかくまれ先づ請じ入れ奉らん。世の中に見えぬ皮ごろもの樣なれば、これをこそまことと思ひ給ひね。人をいたくわびさせ給ひそ。」といひて、呼びすゑ奉れり。かく呼びすゑて、この度は必ずあはむと、嫗の心にも思ひ居り。

かぐや姫翁にいはく、「この皮ごろもは、火に焼かむに、焼けずはこそ、眞物ならむと思ひて、人のいふ事にも負けめ。」「世になきものなれば、それを眞物と、疑ひなく思はんとのたまへ。」「なほこれを焼きて見む。」といふ。翁「それ、さもいはれたり。」といひて、大臣に「かくなむ

申す。」といふ。大臣答へていはく、「この皮は唐土にもなかりけるを、辛うじて求め尋ね得たるなり。何の疑ひかあらむ。」「さは申すとも、はや燒きて見給へ。」といへば、火の中にうちくべて燒かせ給ふに、めら〳〵と燒けぬ。「されば、これを見給ひて、御顏は草の葉の色して居たまへり。かぐや姫はあなうれしと喜びて居たり。かのよみ給へる歌のかへし、箱に入れてかへす。

なごりなくもゆと知りせばかは衣
おもひの外におきて見ましを。

とぞありける。されば歸りいましにけり。世の人々「安倍の大臣は、火鼠の皮ごろもをもていまして、かぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます。」など問ふ。ある人のいはく、「皮ごろもは火にくべて燒きたりしかば、めら〳〵と燒けにしかば、かぐや姫あひ給はず。」といひければ、これを聞きてぞ、とげなきものをばあへなしとはいひける。

九　山岳美論

吉江喬松

吉江喬松
詩人、佛文學者
早稻田大學教授
孤雁と號す
信州の人
明治十三年生

山岳は立體的、彫刻的、線の美、面の美を盛り上げて動ぜざる姿を示す。

山岳は物の始まり、源泉、動力の美を示す。

海洋は廣さと、自由さと、伸々した心持と、同時に動と靜との感じ、叫喚と靜寂、動亂と平穩との美を現はす。森林は集合生活、團體生活、複雜多樣、混淆秩序等、一種複合の美を見せる。山岳は立體的、彫刻的、線の美、面の美を盛り上げて動ぜざる姿を示す。もし海洋が物の成しとげられた美を見せてゐるとするならば、山岳は物の始まり、源泉、動力の美を示すものと云つてよい。

山岳には一種の深い靜けさと、同時に、その靜けさの中から起こる不思議な音樂と、また平地では見られない、純な、澄み切つた色彩

の變化と、それ等を綜合し、統一した全體的、大觀的な、總べてを包む氣分とがある。これは其の頂上に於いて殊に味はゝれるものである。上を仰いで、もう紫の空以外に何物もないといふ山頂に立てば、永遠に對する一種の不可思議な力を覺え、そして氣分は純化せられ、歸一せしめられ、超脱せしめられ、淨化した爽かさを味はゝしめられずにはゐられない。

ユングフラウ

山頂に立てば、永遠に對する一種の不可思議な力を覺え、そして氣分は純化せられ、歸一せしめられ、超脱せしめられ、淨化した爽かさを味はゝしめられずにはゐられない。

Jungfrau スキスの南に連るベルン・アルプ山脈の高峰（一三七〇呎）

ユングフラウの頂上に立つものは、一種の清爽な、同時に敬虔な情に打たれる。大自然が鏤刻したこの巨きな藝術は、その存在そのもの

術は、その存在そのものが直ちに理想である。

Idealisme
Realisme

この麗はしく雄雄しい巨峰が身を以て描き出した一大彫像は、

のが直ちに理想である。こゝにイデアリスムとレアリスムとが握手する。此處に我々は確かな存在性と無限に憧るゝ情念との融合を見出だす。我々の頭上を覆ふ紫紺の空は果てしなき高さを示し、我々が踏む山の頂は大地の動きなき確かさを感ぜしめる。ユングフラウの中腹には、無數の草花が短き季節を、爭つて咲き亂れてゐた。氷河を隔てた日當たりのよい草原には、鈴の音を鳴らしながら、牛の群がさまよつてゐた。登山鐵道の軌道は、八月の日光にも消え殘つてゐる雪の間を縫つて、隧道（トンネル）をくゞり、溪の上を辿つて、次第に頂上へ導いて行つた。雪に輝く尖頭と、氷に埋められた溪谷と、麓の村々と、山の裾をめぐる深碧の湖水と、それを緣どる常綠樹の林と、下より上へ、上より下へ、眞白な雪のちぎれて飛ぶ蒼空の中へ、この麗はしく雄々しい巨峰が身を以て描き出した一大彫像は、理想を現實へ示す一つの象徴として、儼然と屹立して居た。

理想を現實へ示す一つの象徴として、儼然として屹立して居た。

私はこのユングフラウの頂上に立つた時の感じを忘れることが出來ない。この時の壯快な感じは、時々の思ひ出となつて私の心をとりしづめて吳れると同時に、私の情念を高く放つて淨化し洗滌して吳れる。

山岳は恐らく人間が地上に棲息する以前から存在して、人間が始めて目を見開いた時から、その眼前に彼等の偉容と美裝とを輝かしてゐたことであらう。けれども、この眼前に存在する美を、或は遠く地平線上に浮かぶ美の姿を、始めて見た人々は、目には映しながらも、それを美しいとは感じなかつたらしい。或る時期の來るまでは、この天地間に大きく彫り出され、築き上げられ、描き出されてゐる美も、その存在を認められずに隱されてゐたであらう。そしてその時期が來ると、俄に眼前に眞白な山が浮び上つた如く、富士山が一夜にして湧き出でた如く、人々は、驚いて、爭つて、その美

萬葉集時代から日本人は既に富士の美を歌つてゐる。

歐羅巴で山岳の美が人間界に開放されたのは、十九世紀初頭である。

Romantisme

を仰ぎ、その美の前に跪拜せずにはゐられなかつたのである。

この時期は、歐羅巴に比べて日本の方が遙かに早かつたであらう。萬葉集の時代から日本人は既に富士の美を歌つてゐる。けれども吾が國民全體が山岳の美觀を味はふやうになつたのは最近の事である。歐羅巴で山岳の美が人間界に開放されたのは、地上に大革命のあつた後、ロマンティスムの文藝が始めて情緒を開いて自然を感じ初めた時、卽ち十九世紀の初頭である。

十八世紀末までは、山岳といへば、むしろ恐ろしい場處であり、惡魔の棲家であり、足を踏み入る可き處ではないかのやうに思はれてゐた。グンデルワルドといへば今日では、アルプス山中の最も感じのよい、空の美しい、空氣の淸い、そして明らかな谷間であるが、それにも關らず、千七百六十年にグリュンネルといふ人の記述した所では、全く地獄のやうな永久の闇の立ち罩めてゐる谷間で、寒

さは身を切るばかり、そして底知れぬ水溜りのある、恐ろしい肉食鳥の飛んでゐる所だとされてゐる。そしてそこへ足を入れたら最後、二度と出て來られない谷間で、歐羅巴大陸の中での最も恐ろしい、氣味の惡い場所の一つだとされてゐる。

當時の歐羅巴に於ける山岳や自然に對する觀方は、これほど幼稚なものであつた。それ故十八世紀末までは、山を描いても、それは平野から麓まで、或はせい〳〵中腹までの美しさであつた。ルウソオの如き自然の解放者で、そしてアルプスを親しく二度までも徒歩で越えてゐる人でさへも、自然の、山岳の、偉大さ、莊嚴さ、美しさといふ事にはまだ思ひ及ばなかつたのである。彼れの目に映じた自然の美は、林間の空氣の美しさ、草花の香の芳ばしさ、或は谷間の牧人の生活の純樸さといふやうな穩かな、靜かな方面のみの美であつた。

Jean Jacques Rousseau (1712-1778) 佛蘭西の自由思想家、スキスに生る。

十九世紀に入り、ロマンティスムの文藝が盛んになるやうになつて、始めて山岳全體の美しさが說かれ、モンブランの壯嚴とか、伊太利アルプスの大觀とかいふことが、切實に味ははるるやうになつたのである。

Romantisme

Coleridge (1772-1834) イギリスの詩人哲學者

Chateaubriand (1768-1848) フランスの思想家、政治家

Victor Hugo (1802-1885)

それが、十九世紀に入り、ロマンティスムの文藝が盛んになるやうになつて、始めて山岳全體の美しさが說かれ、モンブランの壯嚴とか、伊太利アルプスの大觀とかいふ事が、切實に味ははるゝやうになつた。英國の詩人、コオルリッヂの「モンブランの頌」や、シャトオブリアンの「モンブランの旅」やは、殆んど始めてこの隱れたる美を人界へ引き出したものである。

佛蘭西で山岳の美を說く者は、第一にはアルプス、第二にはピレネェを擧げる。この兩者への旅行は、多くの文藝家の手によつて書かれてゐる。ピレネェを書いたものには、ユゴォがあり、テオフイル、ゴオチェもあるが、殊にイポリット、テエヌのものは、いかにも清新な、爽かな氣分に充ちゝたもので、それと共に精細な觀察、詩的情調が漲つてゐる。

モンブランは、フランス人に取つては、最も美しい山の代表のや

うに考へられてゐる。彼女がリヨンのフゥルヴィエルの丘の上から望まれる遠い地平線上に浮かんだ姿や、或はシャムベリイや、瑞西のジュネェヴから眺められた姿の如きは、いづれも純白な輝かしい美しさを見せてゐて、あらゆる詩人の嘆賞の的となつてゐる。私は幾度となく眺めやつたこの山の氣高い姿を忘れることが出來ない。殊にオオト、ザボワの山中で蒼黒い杉林の上から眺めた夕暮のモンブラン、その白光が薄紅に變はり、やがて又紫にかはつて、遠く空際にたゆたひ、森の中からは傳說の角笛が研し

モンブランの頂上の雪溪

Théophil Gautiér (1811-1872)
Hippolyte Taine (1828-1893)
何れも佛の文豪

モンブランは、フランス人に取つては最も美しい山の代表のやうに考へられてゐる。

て響き渡り、羊の鈴が霧の中を流れて行く上に、殘り惜しげに身を隱したこの山の姿は、永久に忘れることが出來ない。

日本の著名な山々は、概ね佛者等によつて開かれたものである。それは彼等が始祖の業蹟を追うたのか、それとも超脫、純化を生命とした教義の本來に從つたのか、或は難行修道の必須條件とした爲めか、いづれであるか知らないが、日本の高山の多くは早くから多少とも佛教との關係を持つてゐた。そして其處に佛教の超人間的一方面が窺はれる。これに比べると、歐羅巴のクリスト教は、寧ろ平原の中に育ち、或は森林の中から出て來て、より多く集合生活的の味はひを、卽ちより多くの人間味、日常生活味を含んでゐる。日本には古來一般に登山の習慣があつた。隊を組み講社を作つて「お山」へ登るのが一種の義務の如く見られてゐた。日本人に取つては、一種の崇拜の情なしに山頂を眺めることが出來なかつた。

日本の著名な山山は、概ね佛者等によつて開かれたものである。

日本には古來一般に登山の習慣があつた。日本人にとつては、一種の崇拜の情なしに山頂を眺

めることが出來なかつた。

日本人に取つて、山岳は惡魔の棲家ではなくして、寧ろ聖地であり、靈地であつた。其處へ足を入れるのは一種の禮參で、彼等は惡魔を恐るゝことよりは寧ろ神佛の靈地を汚すことを氣遣つた。そして參拜のゆるさるゝ山だけには是非とも登らねばならぬことにされてゐた。今日でも地方によつては、その地方の高山靈山に一度でも參拜しないものは一人前の青年としての資格がないと考へられてゐるところがある。

アルピニストと呼ばるゝ純粹の探檢、探美の人々が登山を初めるやうになつたのは、日本に於いては極めて最近のことで、まだ二十年を出でないであらう。殊に日本の中央山嶺が日本アルプスと呼ばれて、多數の登山者を引きつけるに至つたのは、一層最近のことで、それ以前は、山岳は講社を組んだ一定の禮拜者以外の人には見向きもされなかつたものである。

Stendhal.
本名 Marie Henri Beyle.
(1783–1842)
フランスの小說家

Dauphinée

信州の溫泉地なぞへ行つて見ると、この消息がよく解る。從來の家屋は、所謂日本アルプスに面した方面をば悉く壁にして、その方面へは窓を開けない工風を施してあつた。これまでの人々に取つては、あの美しい日本アルプスも、たゞ冬期に嵐と雪とを吹き送る厄介な山に過ぎなかつたのである。然るに此頃新築する家は悉くその方面へ窓を開けるやうになつたが、要するにこの中央の大山嶺が、十數年前になつて、突如としてその美容を日本人の眼前へ輝かし出だしたのである。

スタンダアルは言ふ、若し巴里の附近に、ドォフィネに於いて見る如き偉大な山岳があつたならば、佛蘭西文學は確かに他の生面を持つてゐたであらうと。我々もまた、東京の近くに日本の中央山嶺のあつたことを望みたい。現在の日本文學は餘りに都會的である、あまりに部分的である。それは少數者の手で作られて配

布せられてゐるに過ぎない。我々の前に俄に生現したこの新らしき自然美が、たゞ好奇と探檢との眼にのみ映ぜられずして、その巨きな投影が、廣くのびて、都會の上までも達したからとて、差支はない筈である。山嶺の氣をして動かしめよ。日本の中央にそゝり立つ巨人をして物を言はしめよ。日本の現在の文學にも、また、他の一新生面が開けて來るであらう。

山嶺の氣をして動かしめよ。日本の中央にそゝり立つ巨人をして物を言はしめよ。

（『自然美論』）

一〇 隅田川

世阿彌

此の一章の句讀は特に謠曲本に從つた。

シテ梅若丸の母
ワキ渡守
ツレ旅人
子方梅若丸の幽靈

ワキ詞「これは武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人人を渡さばやと存じ候。又この在所にさる仔細あつて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人數を集め候。ワキツレ次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、ひも遙々の心かな。詞「かやうに候者は、都の者にて候。我れ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて只今罷下り候。道行「雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、爰ぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり。詞「急ぎ候程に、これは早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乘らばやと存じ候。如何に船頭殿、舟に乘らうずるにて候。ワキ「中々の事召されて候。我れ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて只今罷下り候。

末も東の旅衣、ひも遙々の心かな。

人の親の心……人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（藤原兼輔『後撰集』）

聞くやいかに……聞くやいかにう

て候。我れ東に知る人の候程に、かの者を尋ねて只今罷下り候。道行「雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、いく關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、爰ぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり、渡りに早く着きにけり。詞「急ぎ候程に、これは早隅田川の渡りにて候。急ぎ乘らばやと存じ候。如何に船頭殿、舟に乘らうずるにて候。ワキ「中々の事召されて候へ。先づ〳〵御出で候あとの、けしからず物騷に候は何事にて候ぞ。ツレ「さん候都より女物狂の下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「左樣に候はゞ、暫らく舟を留めて、かの物狂を待たうずるにて候。

シテ、サシ、一聲「實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言づてゝ、行方を何と尋ぬらん。聞くやいかに、うはの空なる風だにも、地「松に音する習ひあ

はの空なる風だにも松に音する習ひありとは（宮内卿、『新古今集』）

り。シテ「眞葛が原の露の世に、地「身を恨みてや明け暮れん。シテ、サシ「これは都北白河に、年經て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり、思ひ子の、跡をたづねて、迷ふなり。地、下歌「千里を行くも親心子を忘れぬと聞くものを、上歌「もとよりも、契り假りなる一つ世の、契り假りなる一つ世の、そのうちをだに添ひもせで、爰や彼處に親と子の四鳥の別かれこれなれや、尋ぬる心の果てやらん、武藏の國と、下總の中にある隅田川にも、着きにけり隅田川にも着きにけり。

シテ詞「なう〳〵我れをも舟に乘せて給はり候へ。ワキ「お事はいづくよりいづ方へ下る人ぞ。シテ「これは都より人を尋ねて下る者にて候。ワキ「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此の舟には乘せまじいぞとよ。シテ「うたてやな隅田川の渡守

日も暮れぬ渡守、はや舟に乘れ日も暮れなむといふに云云（『伊勢物語』隅田川の條）

名にしおはゞ（『伊勢物語』の歌）

ならば、日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ、カ、ル「かたの如くも都の者を、舟に乘るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事な宣ひそよ。ワキ詞「げに〳〵都の人とて名にし負ひたるやさしさよ。シテ「なう其の詞はこなたも耳に留まるものを、かの業平もこの渡りにて、カ、ル「名にしおはゞ、いざ言問はん都鳥、我がおもふ人はありやなしやと。詞「なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワキ「あれこそ沖の鷗候よ。シテ「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ、などこの隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ、カ、ル「げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ「沖の鷗と夕波の、ワキ「昔に歸る業平も、シテ「ありやなしやと言問ひしも、ワキ「都の人を思ひ妻、シテ「わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは同じ心の、ワキ「妻を偲び、シテ「子を尋ぬるも、ワキ「思ひは同じ、シテ「こひ路

舟ぎほふ
舟ぎほふ堀江の川のみなぎはに來ぬつゝ鳴くは都鳥かも（萬葉集、大伴家持）
思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守舟、こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守。

去年三月十五日、しかも今日に相當たりて候。

なれば、地「我れもまた、いざ言問はん都鳥、いざ言問はん都鳥、我が思ひ子は東路に、ありやなしやと、問へども〳〵答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。げにや舟ぎほふ、堀江の川の水際に、來ぬつゝ鳴くは都鳥、それは難波江これはまた隅田川の東まで、思へば限りなく、遠くも來ぬるものかな。さりとては渡守舟、こぞりて狹くとも、乘せさせ給へ渡守さりとては乘せてたび給へ。ワキ詞「かかる優しき狂女こそ候はね。急いで舟に乘り候へ。この渡りは大事の渡りにて候、かまへて靜かに召され候へ。

ツレ詞「なうあの向ひの柳の下に、人の多く集まりて候は、何事にて候ぞ。ワキ「さん候あれは大念佛にて候。それにつきて哀れなる物語の候。この舟の向ひへ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候。語り「扨も去年三月十五日、しかも今日に相當たりて候。人商人の都より、年の程十二三ばかりなる稚き者を買取つて奥へ下り候が、この稚き者、未だ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足もひかれずとて、この川岸にひれ伏し候を、なんぼう世には情なき者の候ぞ、この稚き者をばその儘路次に捨てゝ、商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々、この稚き者の姿を見候に、由ありげに見え候程に、樣々に痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、已に末期と見えし時、お事はいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、われは都北白河に、吉田の何某と申しし人のたゞ一人子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候。都の人の足手影も懷かしう候へば、この道のほとりにつき籠めて、驗に柳を植ゑて賜はれとおとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ遂に事終はつて候。なんぼう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人もござありげに候。逆緣ながら念佛を

都の人の足手影も懷かしう候へば、この道の邊りにつき籠めて、驗に柳を植ゑて賜はれと、

御申し候ひて御弔ひ候へ。由なき長物語に舟が着いて候。とう
とう御上がり候へ。
ワキ詞「いかにこれなる狂女。何とて舟よりは下りぬぞ急いで上が
り候へ。あら優しや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なら
急いで舟より上がり候へ。シテ「なう舟人、今の物語はいつの事にて
候ぞ。ワキ「去年三月けふの事にて候。シテ「さてその兒の年は、ワキ「十
二歳。シテ「主の名は。ワキ「梅若丸。シテ「父の名字は。ワキ「吉田の何某。
シテ「さてその後は親とても尋ねず、ワキ「親類とても尋ね來ず、シテ「ま
して母とても尋ねぬよなう。ワキ「思ひも寄らぬ事。シテ、カ、ル「なう親
類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ。その稚き者こそ、この物狂
が尋ぬる子にて候へとよ。なうこれは夢かやあらあさましや候。
ワキ詞「言語道斷の事にて候ものかな。今まではよその事とこそ存
じて候へ。扨は御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。

人間憂への花盛り、無常の嵐音添ひ、生死長夜の、月の影不定の、雲おほへり實に目の前の、うき世かな。

かの人の墓所を見せ申し候ふべし。此方へ御出で候へ。
シテ「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りたる
に、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても無
慙や死の縁とて、生所を去つて東のはての、道のほとりの土となり
て、春の草のみ生ひ茂りたる、この下にこそあるらめや。地「さりと
ては人々この土を、かへして今一度、この世の姿を母に見せさせ給
へや。歌「殘りても、かひあるべきは空しくて、かひあるべきは空し
くて、あるはかひなき帚木の、見えつ隱れつ面影の、定めなき世の習
ひ、人間憂への花盛り、無常のあらし音添ひ、生死長夜の、月の影不定
の、雲おほへり實に目の前の、うき世かなげに目の前の、うき世かな。
ワキ詞「今は何と御歎き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し
候ひて、後世を御弔ひ候へ。カ、ル「すでに月出で川風も、早更け過ぐ
る夜念佛の、時節なればと面々に、鉦鼓を鳴らし勸むれば、シテ「母は

餘りの悲しさに、念佛をさへ申さずして、唯だひれ伏して泣きゐたり。ワキ詞「うたてやな餘の人多くましますとも、母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれと、鉦鼓を母に參らすれば、シテ「我が子のためと聞けばげに、この身も鳧鐘を取り上げて、ワキ「歎きを止め聲澄むや、シテ「月の夜念佛もろともに、ワキ「心は西へと一筋に、シテ、ワキ「南無や西方極樂世界、三十六萬億、同號同名阿彌陀佛。地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ「隅田川原の、波風も聲たて添へて、地「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。シテ「名にし負はゞ都鳥も音をそへて、地、子方「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ詞「なう〳〵今の念佛の中に、正しく我が子の聲の聞こえ候。この塚の內にてありげに候よ。ワキ「我等も左樣に聞きて候。所詮此方の念佛をば止め候べし。母御一人御申し候へ。シテ「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛。子「南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と、地「聲の內より、幻に見えければ、シテ「あれは我が子か。子「母にてましますか」と、地「互に手に手を取りかはせば又、消え〳〵となり行けば、いよ〳〵思ひはます鏡、面影も幻も、見えつ隱れつする程に東雲の空も、ほの〴〵と明け行けばあと絕えて、我が子と見えしは塚の上の、草茫々としてたゞ、しるしばかりの淺茅が原となるこそ哀れなりけれなるこそ哀れなりけれ。

（『觀世流謠曲』）

橘曙覽　江戸末期の歌人　井手氏　橘氏を稱す　福井の人　明治元年歿　年五十七

正岡子規　明治時代の俳人　歌人　名は常規　伊豫の人　明治三十五年歿　年三十五

俊頼　平安朝末期の歌

一一　橘曙覽の歌

正岡子規

余の初め歌を論ずるや、或る人余に勸めて俊頼集、文雄集、曙覽集を見よといふ。其の斯くいふは三家の集が尋常歌集に異なるところあるを以てなり。余先づ源俊頼の散木弃歌集に失望す。い

人
權大納言源經信の子
井上文雄
江戸末期の歌人
田安家の侍醫
柯堂と號す
明治四年歿

古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵、景樹の窠臼に陷らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縱横に馳驅するところ、却つて高雅蒼老、些の俗氣を帶びず。

くらかの珍しき語を用ゐたる外に何の珍しき事もあらねばなり。次ぎに井上文雄の調鶴集を見てまた失望す。これも物語などにありて、普通の歌に用ゐざる語を用ゐたる外に、何の珍しき事もあらねばなり。最後に橘曙覽の志し濃夫廼舍歌集を見て、始めて其の尋常の歌集にあらざるを知る。

橘曙覽

其の歌、古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵、景樹の窠臼に陷らず、萬葉を學んで萬葉を脱し、瑣事俗事を捕へ來りて縱横に馳驅するところ、却つて高雅蒼老、些の俗氣を帶びず。殊に其の題目が、風月の虛飾を貴ばずして直ちに自己の胸臆を攄くところ、以て識見高邁、凡俗に超越するところあるを見るに足る。而して世人は俊賴と文

松平春嶽
勤王家
名は慶永
福井藩主
明治二十三年歿

赤貧洗ふが如く、常に陋屋の中に住んで世と容れず、古書堆裏獨り破几に凭りて、古を稽へ道を樂しめり。

雄とを知りて曙覽の名をだに知らざるなり。曙覽の事蹟及び性行に關しては、余未だ之れを聞くを得ず。歌集にある所を以て之れを推すに、福井邊の人にして、廣く古學を修め、夙に勤王の志を抱けるが如し。松平春嶽擧げて和歌の師とし、推奬最もつとむ。然れども赤貧洗ふが如く、常に陋屋の中に安んじて世と容れず、古書堆裏獨り破几に凭りて、古を稽へ道を樂しめり。詠歌の如きは固より其の專攻せしところに非ざりしなるべく、胸中の不平は他に漏らすの方無く、凝りて三十一文字と爲りて現はれしものならん。其の歌が塵氣を脱して世に媚びざるは蓋しこれがためなり。彼れ自ら稱して曰はく、

吾が歌をよろこび涙こぼすらむ
　鬼のなく聲する夜の窓
燈火のもとに夜な〳〵來たれ鬼

我がひめ歌の限りきかせむ
人臭き人に聞かする歌ならず
鬼の夜ふけて來ばつげもせむ
凡人の耳にはいらじ天地の
こゝろを妙に洩らすわがうた

何等の不平ぞ、何等の氣焰ぞ。

何等の不平ぞ、何等の氣焰ぞ。彼れは此の歌に題して「戯れに」といひたれども、「戯れ」の戯れにあらざるは、之れを讀むもの誰れか知らざらん。然るを猶ほ強ひて「戯れに」と題せざるべからざるもの、其の裏面には實に萬斛の涕涙を湛へたるを見るべきなり。嗚呼これ不遇の人、不遇の歌。彼れと春嶽との關係と彼れが生活とは春嶽自記の文に詳かなり。曙覽が清貧に處して獨り安んずるの樣、及び春嶽が富貴の身を以て能く士に下るの樣は、その文を見て能く知るを得ん。此の知己あり、曙覽地下に瞑すべきなり。曙覽

萬斛の涕涙を湛へたるを見る。

曙覽地下に瞑すべきなり。

が清貧の境涯は略〻此の文に見えたれども、彼れが衣食住の有樣、その生活の程度如何は、其の歌に因つて一層詳かに知ることを得べし。

人に傘かしたりけるに、久しう返さゞりければ、

童して取りにやりけるに、もたせやりたる
山吹のみの一つだになき宿は
かさも二つはもたぬなりけり

其の貧しさ想ひやるべし。

彼れに「獨樂吟」と題せる歌五十餘首あり。歌としては秀逸ならねど、彼れの性質、生活、嗜好などを知るには最も便なり。其の中に、

たのしみはあき米櫃に米いでき
今一月はよしといふ時
たのしみはまれに魚烹て兒等皆が

余は思ふ、曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、而して貧曙覽が安心の度は、一般文人の安心よりも更に堅固なりきと。

うましく といひて食ふ時

など、貧苦の様を詠みたるもあり。余は思ふ、曙覽の貧は一般文人の貧よりも更に貧にして、而して貧曙覽が安心の度は一般文人の安心よりも更に堅固なりきと。蓋し彼れに不平なきに非ざれども、其の不平は國體の上に於ける大不平にして、衣食住に關する小不平には非ず。同じ「獨樂吟」の中に、

たのしみは木芽にやして大きなる
饅頭を一つほゝばりしとき
たのしみはつねに好める燒豆腐
うまく烹たてゝ食はせけるとき

多言するを須ゐず、此等の歌が曙覽ならざる人の口より出で得べきか否かを考へ見よ。陽に清貧を樂しんで陰に不平を蓄ふる、彼の似而非文人が、「獨樂吟」といふ題目の下に、果たして饅頭、燒豆腐の

仙人の如き、佛の如き、子供の如き、神の如き曙覽は、余理想界に於いて之れを見る。

味を思ひ出だすべきか。彼等は酒の池、肉の林と歌はずんば、必ずや麥の飯、藜の羹と歌はん。饅頭、燒豆腐を取つてわざ〳〵之れを三十一文字に綴る者、曙覽の安心ありて始めて之れ有るべし。あら面白の饅頭、燒豆腐や。

たのしみは錢なくなりてわびをるに
人の來りて錢くれし時
たのしみは物をかゝせて善き價
惜しみげもなく人のくれし時

曙覽は欺かざるなり。彼れは錢を芥の如しとは言はず、あどけなくも彼れは錢を貰ひし時のうれしさを歌ひ出だせり。猶ほ正直にも、彼れは錢を多く貰ひし時の思ひがけなきうれしさをも白狀せり。仙人の如き、佛の如き、子供の如き、神の如き曙覽は、余理想界に於いて之れを見る、現實界の人間としては殆んど承認する能は

彼れの心や無垢清淨、彼れの歌や玲瓏透徹。

臨むに諸侯の威を以てし、招くに春嶽の才を以てし、而して一曙覽をして破屋竹笋の間より起たしむる能はざりし者、何が故ぞ。謙遜か、傲慢か、將た彼れの國體論は妄りに仕ふるを許さざりしか。

ず。彼れの心や無垢清淨、彼れの歌や玲瓏透徹。

貧此くの如し、高此くの如し。一たび之れに接して畏敬の念を生じたる春嶽は、之れを聘せんとして、侍臣をして命を傳へしめしも、曙覽は辭して應ぜざりき。文を賣りて米の乏しきを歎き、意外の報酬を得て思はず打ち笑みたる彼れは、此に至つて名利を見ること門前の土芥の如くなりき。臨むに諸侯の威を以てし、招くに春嶽の才を以てし、而して一曙覽をして破屋竹笋の間より起たしむる能はざりし者何が故ぞ。謙遜か、傲慢か、將た彼れの國體論は妄りに仕ふるを許さざりしか。いづれにもせよ、彼れは依然として饅頭、燒豆腐の境涯を離れざりしなり。慶應三年の夏始めて秩祿を受くるの人となりしも、僅かに二年を經て明治二年の秋、彼れは神の國に登りぬ。曙覽が古典を究め學問に耽りし事は、別に說くを要せず、貧苦の中に居りて「机に千文八百文堆く載せ」たりといふ一事は、之れを盡くして餘りあるべし。其の敬神尊王の主義を現はしたる歌の中に、

高山彦九郎正之

大御門そのかたむきて橋の上に
　項根突きけむ眞心たふと

折にふれてよみつゞけける

吹く風の目にこそ見えね神々は
　此の天地にかむづまります

獨樂吟

たのしみは戎夷よろこぶ世の中に
　皇國忘れぬ人を見るとき
たのしみは鈴屋大人の後に生れ
　その御諭をうくる思ふ時

赤心報國

國汚す奴あらばと太刀拔きて
　仇にもあらぬ壁に物いふ

示　人

天皇は神にしますぞ天皇の
　勅としいはゞかしこみまつれ

極めて安心に極めて平和なる曙覽も、一たび國體の上に想ひ到る時は、滿腔の熱血を灑ぎて、敬神の歌を作り、不平の吟を爲す。慷慨淋漓、筆劍の如し、又平日の貧曙覽にあらず。其の纔かに王政維新の盛典に逢ふを得たりし事、彼れに取りて、如何ばかり嬉しかりけん。

曙覽の歌が比較的、何集の歌に最も似たりやと問はゞ、我れも人も一齊に萬葉に似たりと答へん。彼れが古今、新古今を學ばずして萬葉を學びたる卓見は、我が第一に賞揚せんとする所なり。彼

萬葉が遙かに他集に抽んでたるは論を待たず、其の抽んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現はし得ざるに反し、萬葉の歌は善く之れを現はしたるに在り。

れが萬葉を學んで比較的善く之れを摸し得たる伎倆は、我が第二に賞揚せんとする所なり。そも〳〵歌の腐敗は古今集に始まり、足利時代に至つて其の極點に達したるを、眞淵等一派古學を闢き、萬葉を解き、やうやく一縷の生命を繫ぎ得たり。されど眞淵一派は萬葉を解きて萬葉を解かず、口には萬葉をたゝへながら、おのが歌は古今以下の俗調を學ぶが如きトンチンカンを演出して、笑ひを後世に貽したり。萬葉が遙かに他集に抽んでたるは論を待たず、其の抽んでたる所以は、他集の歌が毫も作者の感情を現はし得ざるに反し、萬葉の歌は善く之れを現はしたるに在り。他集が感情を現はし得ざるは感情を有りの儘に寫さざるがためにして、萬葉が之れを現はし得たるは之れを有りの儘に寫したるがためなり。曙覽の歌に曰はく、

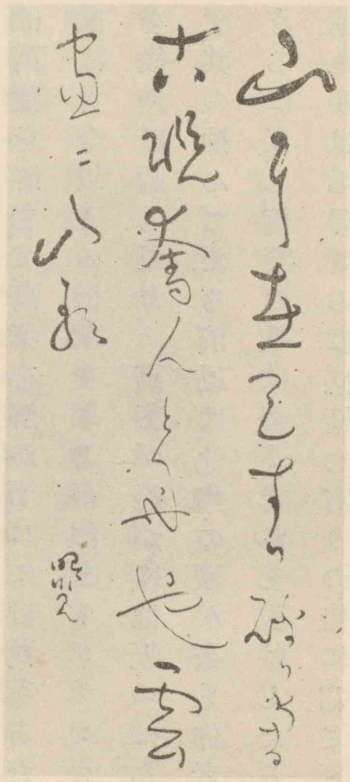
いつはりのたくみをいふな誠だに

誠の一字は曙覽の本領にしてやがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にしてやがて和歌の本領なり。

山にありてすり破りたる古硯奪はんとにや雲窓に入る　曙覽

さぐれば歌はやすからむもの

「いつはりのたくみ、」古今集以下皆是れなり。「誠」の一字は曙覽の本領にしてやがて萬葉の本領なり。萬葉の本領にしてやがて和歌の本領なり。



橘曙覽筆蹟

我が謂ふ所の「有りの儘に寫す」とは即ち誠に外ならず。

後世の歌人といへども、誠を詠め、有りの儘を寫せと空論はすれど、其の作る所の却つていつはりのたくみを脫する能はざるは、「誠」「有りの儘」の意義を誤解せるに因る。西行の如きは幾多の新材料を容れたる處、或は此の意義を解する者に似たれど、實際を見ば百中の九十九は皆

趣味を自然に求め手段を寫實に取りし歌、前に萬葉あり、後に曙覽あるのみ。

さばれ曙覽は徹頭徹尾萬葉を擬せんと務めたるに非ず、寧ろ其の思ふまゝを詠みたるが、自ら萬葉に近づきたるなり。

いつはりのたくみなるを知らん。趣味を自然に求め、手段を寫實に取りし歌、前に萬葉あり、後に曙覽あるのみ。されば曙覽が歌の材料として取り來れるものは、多く自己周圍の活人事、活風光にして、題を設けて詠みし陳腐なる花月にあらず。其の取材手法全く萬葉と揆を一にせり。さばれ曙覽は徹頭徹尾萬葉を擬せんと務めたるにあらず、寧ろ其の思ふまゝを詠みたるが、自ら萬葉に近づきたるなり。曙覽が德川時代の最後に出でて、始めて濶眼を開き、多くの新材料、新題目を取りて歌に入れたる達見は、趣味を千年の昔に求めて目睫に失したる眞淵、景樹を驚かすべく、進取の氣ありて進み得ず、踏跙逡巡として姑息に陷りたる諸平、文雄を壓するに足る。德川時代の歌人が僅かに客觀的趣味を解しながら、深く其の蘊奥に入る能はざりしは第一に「新言語新材料を入るべからず」といふ從來の規定を脫却する能はざりしに因る。曙覽は先づ此

曙覽の歌は、萬葉に、實朝に及ばざる事遠しといへども、貫之以下今日に至る幾百の歌人を壓倒し盡くせり。

の第一の門戸を破りて歌界改革の一歩を進めたり。之れを要するに、曙覽の歌は、萬葉に、實朝に及ばざる事遠しといへども、貫之以下今日に至る幾百の歌人を壓倒し盡くせり。新言語を用ゐ、新趣向を求めたる彼れの卓見は、歌學史上特筆して後に傳へざるべからず。彼れは歌人として實朝以後の唯一人なり。眞淵、景樹、諸平、文雄輩に比すれば、彼れは鷄群の孤鶴なり。歌人として彼れを賞讃するに千言萬語を費すとも過讃にはあらざるべし。若し夫れ曙覽の人品性行に至りては、磊々落々世間の名利に拘束せられず、正を守り、義を取り、俯仰天地に愧ぢざる、蓋し絶無僅有の人なり。

一二　白帝城

大正八年の八月二日、私は朝はやく京都を發ち、夕方薄暗くなつ

犬山　尾張國丹羽郡の北隅

白く光る大川を帶に繞らして、翠を凝らした山の上に白を凝らした三層樓の雄姿は、げに「白き帝の城」とも

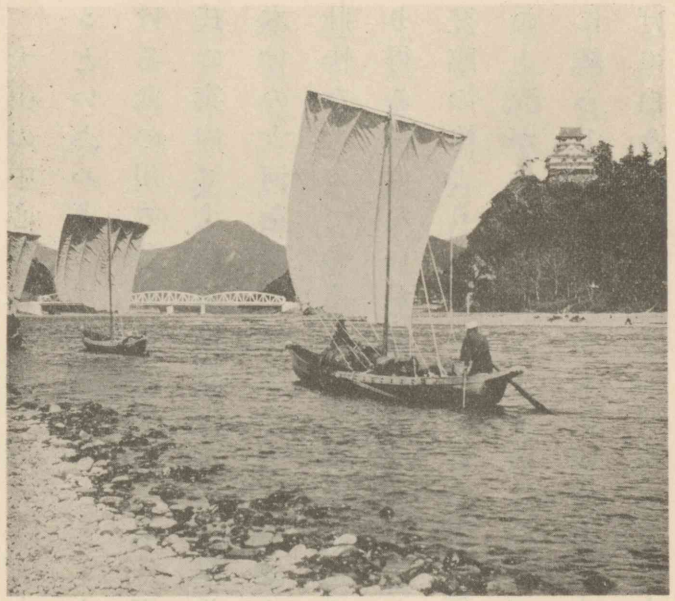
て、犬山町の一旅館に落ちついた。

犬山の中心興味は白帝城と呼ばれる犬山城と、此の頃日本ラインといふハイカラ名で知られ出した木曾川の谿谷美と、夏季に於ける此の川の鵜飼とにある。私は翌る三日の午前に、山田、後藤二氏の案内で、犬山城に登つた。三階造りのどッしりとしたもので、木曾の大河を脚下に踏まへて、濃尾の平野を見はるかす趣は、實に壯快なものである。此の城の構造や歴史の委しい事は、吾等の語り得る所でないが、自然美の一部として此の城の第一の面白味は、登臨の快よりも寧ろ川向ひの美濃領から仰いだ所、殊に此の大川の上流から望みつゝ下る所にあるであらう。白く光る大川を帶に繞らして、翠を凝らした山の上に白を凝らした三層樓の雄姿は、げに「白き帝の城」とも名づくべきであらう。此の稱はもと名高い李白の詩に借りたものであらうが、滿目綠叢の山の頂に一點の白

名づくべきであらう。

巨岩が立ち連り大木が枝をさしかはす脅威の幾峽谷を逃れ來つて。

を點じた城であり、大河の上に、濃尾兩州の平野の上に、帝王の如く臨んだ城である事を考へると、この名が寧ろ此の城の爲めに案ぜられたのではないかとも思はれる。



白帝城

木曾の激流を下る舟人が、巨岩が立ち連り、大木が枝をさしかはす脅威の幾峽谷を逃れ來つて、はじめて開け渡つた平野の空に高く聳えた城樓を望む時の心地は、どうであらうか。ふと目に留まつた大きな城の影が隱れつ見えつする間に、見える

奥山の暗い峽谷の間から、廣い明るい世界を慕つて來る者に取つて、あの犬山の翠微の間に聳えた古城は、まことに木曾一峽の、岩の、流れの、空を慕ふ心を集めて成れるかのやうにも見えるであらう。白帝城よ、汝は實に木曾一峽の仰望であり、濃尾の平野の眼睛である。

時間が次第に長くなつて、遂には見つめ通しに仰ぎつゝ、其の麓に漕ぎ寄せる時の心地は、どうであらうか。奥山の暗い峽谷の間から、廣い明るい世界を慕つて來る者に取つて、あの犬山の翠微の間に聳えた古城は、まことに木曾一峽の、岩の、流れの、空を慕ふ心を集めて成れるかのやうにも見えるであらう。白帝城よ、汝は實に木曾一峽の仰望であり、濃尾の平野の眼睛である。

白帝城

大木曾の木々の滴りあつめ來て
犬山の峽に藍やたゝふる
麓には翠を凝らしいたゞきに
白をこらせる犬山の城
岩白し川波白し城白し
白の帝の峽とたゝへむ

一峽の岩の流れの空したふ

心あつめて城やそびゆる

私は此の三層天守の上層に立つて、この界隈の古今にわたる歴史地理を說き示され、織田氏以來の戰場や古跡を指點された。私は頷き〳〵聽き了つて城を出た。

白帝城を出てから吾等は山の麓の凝翠亭で晝餐をたべた。そして舟を儆つて此の美しき溪流を遡つた。谷を挾んだ夏の山は鬱蒼と茂りに茂つて居る。其の間からいろ〳〵な色彩の岩石が大膽に露出して、恐ろしい、面白い、滑稽な、いろ〳〵の姿態を見せて居る。また其の間を狂ひ下る奔流が、激しては淀み、渦まいてはほどれ、瀨となり、淵となり、瀧となつて、極まりなき變化を見せて居る。或は谷の幅一ぱい悉くピチヤ〳〵水になつて、石ころの間に舟を引きずつて遡らねばならぬ所がある。或は開けわたつた大瀞の

其の間を狂ひ下る奔流が、激しては淀み、渦まいてはほどれ、瀨となり、淵となつて、極まりなき變化を見せて居る。

彼方に遠山を望む所がある。或は犬牙の如く兩方から突き出た大岩の間を、しぶきを浴びつゝ、波の穗先を素早くかはして通らねばならぬ所がある。或は浪の立たぬ靜かな流れが暫らく續いて、兩岸に立ち並んだ盆景のやうな岩群を靜かに眺めつゝ、悠々として蜩の聲や猿の遊戯に心を遊ばせ得る所もある。およそ豐富な岩と水と山とが親しみ馴染んで變幻の妙を極めた點に於いて、此の谷に及ぶ所はめつたにあるまい。殊に此の谷の一つの特色ともいふべきは、岩石の質が硬くつや〳〵して居ることであり、又個個に切り離して見ても、よく締まつて面白い形をして居り、同時に全體として見れば、更に面白く雄大な眺めを成して居ることである。取りわけ私の心を惹いたのは、犬山から二三十町溯つたところの右側に、目を奪ふやうな五色の岩群の立ち並んで居る所であつた。最も珍らしいのは、綠青色や、黃色や、丹色の岩で、それにいろ

豐富な岩と水と山とが親しみ馴染んで變幻の妙を極めた點に於いて、此の谷に及ぶ所はめつたにあるまい。

木曾の谿谷のこの五彩錦繡の岩は、色彩の美から見て、恐らく天下に類の少ないものであらう。

上りの味は骨を折つて漕ぐ一櫂

いろな他の色彩の岩の交つた趣は、誠に錦の岩ともいふべきものであつた。私は其の後、北海道の登別温泉に遊んで、地獄廻りをした時に、小形ながら丁度是れと同じやうな色彩の岩群が、あの噴火坑内に立ち並んで居るのを見たが、木曾の谿谷の此の五彩錦繡の岩は、色彩の美から見て、恐らく天下に類の少ないものであらう。

此の谿には岩と水と樹木との美妙な調和を成した、かやうな絶景が、二三里切れ目なしに續いて居るといふことで、其の間に駱駝岩、猿岩、獅子岩、鳶岩、眼鏡岩、兜岩、網干岩、川平の二つ岩、不二の瀨、觀音の瀨などいふ、いろ〳〵の岩や淵や瀨があり、山にも夕暮富士、伊木山、氷室山、瑞泉寺山、寶積寺山など、數々あるが、一々の眺めは、とても筆の上に寫せることではない。

吾等は絶景の一里半ばかりを遡つて舟を返した。歸りの船は矢の様に早い。上りの味は骨を折つて漕ぐ一櫂々々の間々に岩、

一櫂の間に、岩、淵、瀨、瀧の光景を間近に委しく見る所にある。下りの味は船を激流の運ぶに任せつゝ、舷に凭れ、仰り返つて、樂々と遠近を見渡す所にある。

淵、瀨、瀧の光景を間近に委しく見る所にある。下りの味は、船を溪流の運ぶに任せつゝ、舷に凭れ仰り返つて、樂々と遠近を見渡す所にある。上りは骨折りの接近精細觀、下りは樂ぞりの概觀的遠望、そして遠望しながらの無駄話もまた一つの特殊興味であらう。

ふと見ると、數ある下り船の中に、五六艘、長い竿の尖頂に五六尺の白旗を飜して行くのがある。私は怪しんで後藤氏に尋ねると、

「エ、あれですか。あれは困りものでしてね。實は船頭の犢鼻褌なんですよ。上りに水を浴びた奴を、川風に干しながら下るといふわけなんですが、一番困るのは西洋人に尋ねられた時なんです。志賀さんが日本ラインなんて命けてから、ラインの名が懷かしいと云つて、よく獨逸人などが來ますからね。さういふ人に尋ねられた時は、仕方がないから「あれは源氏の白旗といふんで、あの細長いのは源平時代の軍旗の形式が殘つたのだ。

其の源平時代に木曾義仲といふ源氏の豪傑が、木曾の谷間から、あゝいふ白旗を押し立てゝ、都に攻め上つて、旭將軍と云はれた、其の木曾殿の旗上げの思出に、あの白い旗を立てゝ木曾川を下るのだ。」と、かう云つて聞かせますと、大悅びて、「へエ、、それぢやなか〳〵馬鹿に出來ない、歴史的な由緒の旗ですね。」といふんですよ。いや笑ふにも笑はれず、困つてしまひます。」

「これは面白い。木曾殿は大出來ですね。」

など云つて笑つて下る。また樂ぞりの遠望をして行く中に、狹い谷の寄せ合つた間から、思ひ設けず犬山城の白い影を見出だした時の嬉しさは、なかつた。それから懸崖、絶壁、旋流、急瀨の、人をひや時の嬉しさは、なかつた。

樂ぞりの遠望をして行く中に、狹い谷の寄せ合つた間から、思ひ設けず犬山城の白い影を見出だした時の嬉しさは、なかつた。

ひやさせる光景が段々となごめられて、次第に明るく、廣く、平らに、靜かになつて來る。不老閣の崖下のあたりからは、すつかり平野の大川の氣持になつて、やがて舟出したもとの犬山の麓に着いた。

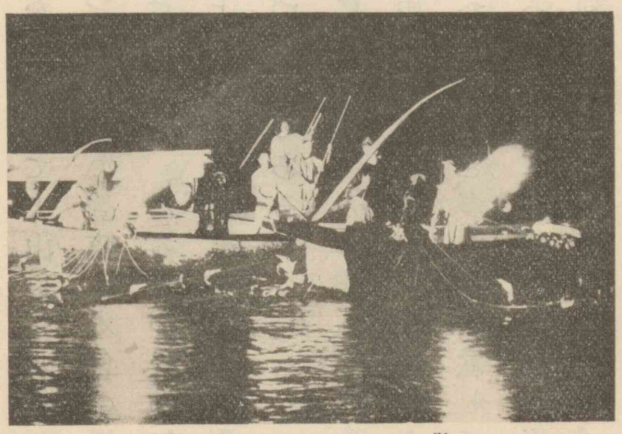
光榮ある一日よ。吾等はこの一日を三分して犬山の三名物を賞翫しようといふのである。その二つ、「白帝城の登臨」と「木曾の溪流の探勝」とは、午前午後の二度に仕遂げられた。殘る一つは「鵜飼」で、之れを見るために、吾等は不老閣に上つて夜の腹を拵へた。看は此の川名物の鮎づくしのうまい物づくめである。

篝火に送られて舟に乘るのは、珍しい古代な心地であつた。

九時近くになつて舟に乘る。篝火に送られて舟に乘るのは、珍しい古代な心地であつた。大川の眞中に漕ぎ出でると、其處には大小百艘ばかりの遊覽船が、茶菓を備へ、酒を置き、多くは絃歌して、にぎやかに鮎船の來るのを待つてゐる。やがて、上流に篝火の影が見えた。三つの影である。篝火が刻々に近づいて來る。近づくまゝに舷に立つて一ぱいに火影を浴びた烏帽子姿の鵜尉が見えて來る。やがて、三艘の鮎船が全形を顯はして、同時に鵜尉の繩

三個の焔の大塊は爛々と吾等の前に燃えて居る。三人の鵜尉の赤い顔は、昂奮しながら、悠悠として水面を見つめてゐる。手の中の十二本の繩は十二羽の鵜の浮沈し前後し左右するに從ひ、自在に取りさばかれて、其の間に鮎を呑んだ鵜が、順ぐりに舷に引き上げられ、吐き出させられて、又水に入れられる。其の繩さばきがまた實に神に入つたもので、尉の脈が繩に通つて、繩の神經が鵜の神經に通じてゐるかと疑はれる位。

にあやつられて浮きつ沈みつする鵜の影がはつきりと見えて來た。三艘の鵜船は、やがて吾等の前に來た。三個の焔の大塊は爛爛と吾等の前に燃えて居る。三人の鵜尉の赤い顔は、昂奮しながら、悠々として水面を見つめてゐる。手の中の十二本の繩は十二羽の鵜の浮沈し前後し左右するに從ひ、自在に取りさばかれて、其の間に鮎を呑んだ鵜が、順ぐりに舷に引き上げられ、吐き出させられて、又水に入れられる。其の繩さばきがまた實に神に入つたもので、尉の脈が繩に通つて、繩の神經が鵜の神經に通じて居るかと疑はれる位、三十六羽の荒鵜どもが、三塊の篝火



鵜飼

てゐるかと疑はれる位。

鵜が鮎を追ひかける姿は實に豫想外の面白いもので、翼や足をばすつかり隱して、譬へば一本の細い棒のやうになり、或は太い鰻のやうになつて、矢を射る如く突き進むが、やがて追ひついて、追ひつけばすぐに呑む。三疋も五疋に刺戟され、百艘の遊覽船と數百千の人數とに囃され、水中の鮎の群に促されて、右往左往する、其の混雜紛糾の間を、家常茶飯と取りさばいて使嗾け、引き上げ、吐き出させ、飛び込ませる悠々たる早業は、とても人間業とは思はれなかつた。

鵜の活動も一通りでない。舷の上に外方向いて立つて居るかと思ふと、不意に飛び込んで、あの素早くおよぐ鮎を一呑みにする。鮎が逃げると、隙間もなく電光のやうに追ひかける。彼れが鮎を追ひかける姿は實に豫想外の面白いもので、翼や足をばすつかり隱して、譬へば一本の細い棒のやうになり、或は太い鰻のやうになつて、矢を射る如く突き進むが、やがて追ひついて、追ひつけばすぐに呑む。三疋も五疋もつゞけざまに呑む。たまさか魚の胴腹を横咿へにでもした時には、ヒラリと空中に振り上げて、もんどり打たせて、頭から呑み直す。其の早業曲業の面白さは、とても筆や詞

もつゞけざまに呑む。たまさか魚の胴腹を横咖へにでもした時には、ヒラリと空中に振り上げて、もんどり打たせて、頭から呑み直す。

の盡くし得る所でない。

六七疋も呑んで喉元が脹れると、尉が綱を曳いて、舷へ上げて、魚を吐かせる、そして頸筋を一撫でして、痛はつて、又水中に飛び込ませる。かくして幾度も働いた後に、十二羽舷に並んで、ガア〳〵と太平樂な原始的の音を鳴いて居る愛らしさ。

一つ〳〵に書けばこんなものだが鵜飼の妙味はこれに盡きるのではない。その尉と繩と鵜とが一心同體となつて、篝火の下の川の面を戲場化させる時には、實に一々を忘れ、一切を忘れて恍惚となるばかりである。まことに恥も人目も後の世も忘れられるばかりである。

吾等が鵜船の興は一時間足らずで濟んだ。私はそれから兩氏に送られ、宿に歸つて、熱した頭を冷えた枕に横たへた。

黑き夜に赤きはかゞり眞白きは

己がさま〴〵なる物ずき。

鵜のはしに飛ぶあゆのかげかな

鮎よ、鵜よ、見る人よ、舟よ、川波よ、

にげ追ふうちに立ち騷ぐうちに

爛々のかゞりをあびて悠々と

十二の繩をさばく尉かな

（『遠近』）

一三　百魚譜

横井也有

人は武士、柱は檜の木、魚は鯛とよみ置きける。世の人の口における、己がさま〴〵なる物ずきはあれども、この魚をもて調味の最上とせむに咎あるべからず。絲かけて臺にするゑたる男振さへ、外に似るべくもなし。然るを唐土には、いかにしてか殊に賞翫の沙汰も聞こえず、これに乘りける仙人もなし。されば夷三郎殿も、他

夷三郎殿も、他の葉武者には目もかけず、たゞこれにこそ釣も垂れ給へ。

龍は鱗の司

多能を恥づといひけんを中々譽れと思へるにや。

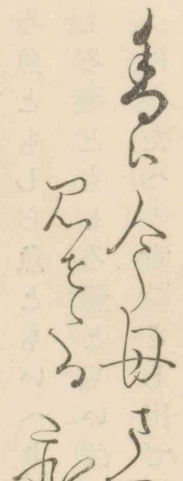
の葉武者には目もかけず、たゞこれにこそ鈎もたれ給へ。龍を鱗の司といふは、食味はなれたる理窟にして、さはこれを料理せんと學びたる人は、昔愚かなる名をもこそとゞめたれ。

横井也有

龍門瀧にのぼらんとする魚ありて、おほけなくも大聖の御子にも、この名をからせ給へる。されば世の名聲はかの鯛にも並ばむとす。かれは如何なる幸にかあらむ。味はひ美なりといへども、鯛の料理の品々なるには似るべくもなし。乾物炙物にせず、鱠清汁によろしからず、くづし蒲鉾に用ゐ難く、鹽にも鮨にも調ぜず。唯だ刺身あつ物にとゞまるは、多能を恥づといひけんを、中々譽と

いかに世に名の事々しきぞ

思へるにや。昔平家に惡七兵衛景清と名乗りて、今民間には泣く子をも威すべく、朝比奈辨慶に肩を並べんとす。然るに記錄の上にしては、鍛曳の外はさせる働なくて、唯だ二郎兵衛も五郎兵衛も同じ列なる侍なり。いかにしきぞと、ある人評したりけり。かれたゞ七兵衛が類ひなるべし。



也有筆蹟

松江の名產、我が朝にも品くだらず。張氏はこれを秋風に思ひて仕途を辭し、平家はこれを船中に得て官路に進む。進退いづれをか羨むべき。

鮭は越路に名ありて、其の國の雪にも似ず、色は入日の雲を染め

て、うるはしく照りたるこそいみじけれ。たま〳〵鱒といふものも、その色は負けじとや挑むらんを。

牡丹は花の一輪にて賞せられ、梅櫻は千枝萬葩を束ねて愛せらる。それが勝れりとも、劣れりとも、更に衆寡の論には及ばず。白魚といふものの世にもてはやさるゝを、かの鯛鱸の大魚に比すれば、今いふ梅櫻の類ひと等し。しかるに、國俗のとなへ異にして、しろ魚ともしら魚ともいへり。是れいづれならんといふに、されば、しろ菊ともしろ鷺ともいはねば、しら魚といふこそよからめといへば、かたへの童のさし出でて、否とよ、世にしら猫ともしら鼠ともいふにこそと打込まれて、爰に物定めの博士暫らく默然たり。

鰷は鵜川の篝火に責められ、鯰は濁江の瓢簞におさへらる。比

色は入日の雲を染めて、うるはしく照りたるこそいみじけれ。

物定めの博士。

目魚は黑白に裏表をあらはし、海鼠は後も先もなし。

こゝに蛸の入道は、壺に入りてとらるゝこそ愚かなれ。那智の瀧壺ならば、文覺が行力をも傳ふべきを、一休の口にはほめられながら、まさなの法師の身の果かな。

（『鶉衣』）

まさなの法師の身の果かな。

一四　新島守

（增鏡）

本院は隱岐の國におはしますべければ、先づ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、淺ましうあはれなり。ものにもがなやと思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一二や餘らせ給ふらむ、まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿うつしか

本院
後鳥羽院
七月七日
承久三年

ものにもがなや
とりかへすもの
にもがなや世の
中をありしなが
らのわが身と思
はん

信實
右京權太夫
藤原氏

文永二年歿年八十九
七條の院
典侍藤原殖子
後鳥羽天皇の御生母

遙かなる浪路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう如何なりける世々の報いにかとうらめし。

新院
順德上皇
帝
仲恭天皇

中ノ院
土御門上皇

かせらる。七條の院へ奉らせ給はむとなり。

かくて同じき十三日に、御船にたてまつりて、遙かなる浪路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず、いみじう如何なりける世々の報いにかとうらめし。新院も佐渡の國にうつらせ給ふ。まことや七月九日、御門をもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これや始めなるらむ。さて上達部、殿上人、それより下、はた殘りなく、此の事にふれにしたぐひは、重く輕く罪にあたるさまいみじげなり。

後鳥羽天皇（信實筆）

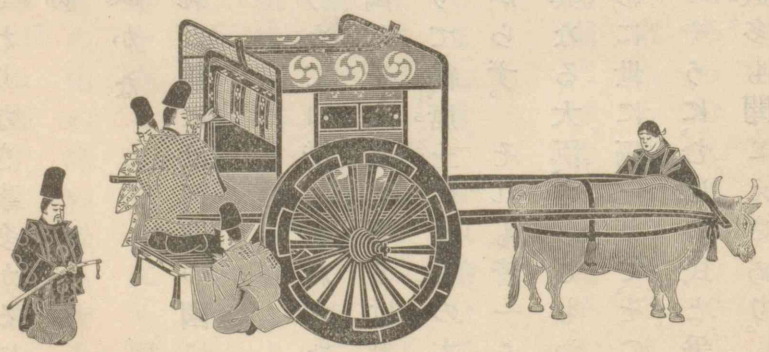
中ノ院は初めより知らしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父

八二 後鳥羽 ─ 八三 土御門 ─ 八八 後嵯峨
　　 ─ 八四 順德 ─ 八五 仲恭

若宮
邦仁親王
後嵯峨天皇

源通親 ─ 通宗 ─ 通子（後嵯峨御母）
　　 ─ 通方
　　 ─ 承明門院重子（土御門御母）

の院遙かに移らせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらむ事、いとおそれありと思されて、御心もて、その年閏十月十日、土佐の國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御兄に通宗の宰相中將とて、若くて亡せ給ひし人の女の御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家に留め奉り給ひて、近く侍ひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ、御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、吹雪して、こし方行く先も見



網代車

えず、いと堪へ難きに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ
　ことわり知らぬわが涙かな

せめて近きほどにと東より奏したりければ、後には阿波の國に移らせ給ひにき。

さても此の度世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは父の王をうしなふためしだに、一萬八千人までありけりとこそ、佛も說き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなす事、數へ盡くすべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけむ。もしはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけとなるべききざみの、少しのたがひめに世に隔たりて、その怨みの末などより事起こるなりけり。今のやうに、むげの民と爭ひて、君の滅び給へるためし、この國にいと數多も聞こえざめり。ふ

さても此の度世のありさま、げにいとうたて口惜しきわざなり

斯くいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの事にもあらざらめども、迷のおろかなる前には、なほいとあやしかりし。

津の國のこやのひまなき政事をきこし召すにも、難波の葦の亂れざらむ事をおぼしき。

りにし事を思ふにも、なほさりともいかでか、上皇、今上、あまたおはしまし王城の、いたづらに亡ぶるやうやはあらむと、賴もしくこそおぼえしに、斯くいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつの事にもあらざらめども、迷のおろかなる前には、なほいとあやしかりし。

六つにて位に卽き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、猶ほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、此の國の主として萬機の政事を御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有樣にて、遠きを憐び、近きを撫で給ふ御惠み、雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやのひまなき政事をきこし召すにも、難波の葦の亂れざらむ事をおぼしき。藐姑射の山の峰の松も、やうやう枝を連ねて千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を經

ありく〳〵てよしなき一ふしに、

明日知らぬ世の後めたさ。

ても、空ゆく月日の限り知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありく〳〵てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへ立ち別かれ、おのがちりぢりにさすらへ、いそのとまやに軒を竝べて、おのづから言問ふものとては、浦に釣する蜑小舟、鹽燒く煙のなびく方をも、我がふる鄕のしるべかとばかり眺め過ぐさせたまふ御住居どもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世の後ろめたさに、いと心ぼそかるべし。まいて何時をはてとかめぐり逢ふべき限りだになく、雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ境に、世を盡くし給ふべき御さまども、口惜しともおろかなり。

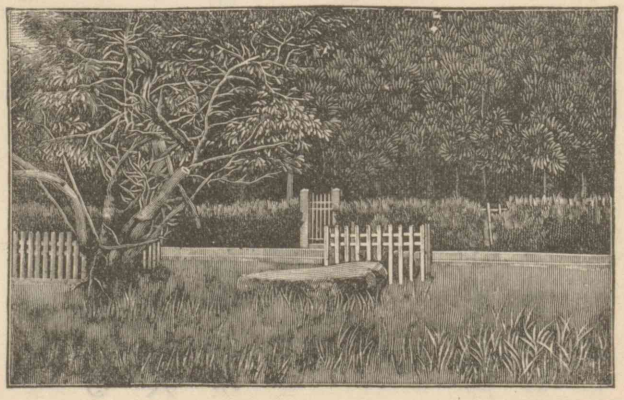
後鳥羽天皇宸筆

松の柱に葦ふける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。

二千里の外
三五夜中新月色
二千里外故人心
（白樂天）

此のおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山陰にかたそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦ふける廊など、けしきばかり、ことそぎたり。誠に柴の庵のたゞしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしくゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀨殿おぼしいづるも夢のやうになむ。はるゞゝと見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、いまさらめきたり。潮風のいとこちたく吹き來るをきこし召して、

我れこそは新島守よおきの海の



隱岐黑木御所跡

あらき波風こゝろして吹け
おなじ世にまたすみのえの月や見む
今日こそよそにおきの島守

年もかへりぬ。所々浦々哀れなることをのみおぼし歎く。佐渡院あけくれ御行ひをのみし給ひつゝ、猶ほさりともと思さる。隱岐には、浦よりをちのはるゝと霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方かき盡くしおもほし出づるに、行方なき御涙のみぞ止まらぬ。

猶ほさりともと思はる。

うらやましながき日影の春にあひて
しほくむあまも袖やほすらむ

夏になりて、茅葺きの軒端に、五月雨のしづくいと所せきも、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふくかやが軒端に風過ぎて

しどろに落つる村雨の露

初秋風の立ちて、世の中いとど物悲しく露けさまさるに、いはむ方なくおぼしみだる。

故郷をわかれ路におふるくずの葉の
秋は來れどもかへる世もなし

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕ぐれに、沖の方にいとちひさき木の葉の浮かべると見えて漕ぎ來るを、あまの釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜さむにおもひやりきこえさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく御胸もせきあぐる心地すれば、やゝためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日へにける事。今日明日とも知らぬ命のうちに、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらは死出の山路も越えやるべうも侍ら

あまの釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。

七條院　藤原殖子後鳥羽院の御母

でなむ。」など、いと多く亂れかき給へるを、御顏におしあてゝ、

たらちねの消えやらで待つ露の身を
風よりさきにいかでとはまし

八百萬神もあはれめたらちねの
我れ待ち得むとたえぬ玉の緒

初雁のつばさにつけつゝ、こゝかしこより、あはれなる御消息のみ常は奉るを、御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學
文科大學助教授
號は東圃
明治四十三年歿
年四十一

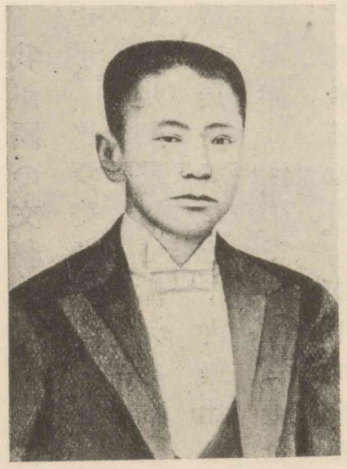
一五　明治以前の我が繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭ならざるに至れるが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、

彼れは色彩を旨とし、此れは描線を重んじ、彼れは實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此れは主體の外は生地のまゝに存す。一は濃艶、一は瀟洒。一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。

各自の特色は尙ほ甚だ顯著なり。啻に絹紙と彩具との相違のみならんや。其の用意筆法等に於いて皆然り。彼れにあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗つとめて自然に背かざらんことを期し、此れにあつては文化の精神的方面、獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乘じて腦裏の印象を瀉ぎ出だす。


藤岡作太郎

彼れは色彩を旨とし、此れは描線を重んじ、彼れは實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此れは主體の外は生地のまゝに存す。一は濃艶、一は瀟洒。一は輪奐たる樓臺に顯官が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋に高士が梅を愛するに似たり。これらの差別は、蓋し其の初めよりして然りしにあらず、各自獨立したる歷史が漸

吾が美術の歴史は、聖德太子の佛教興隆に始まる。

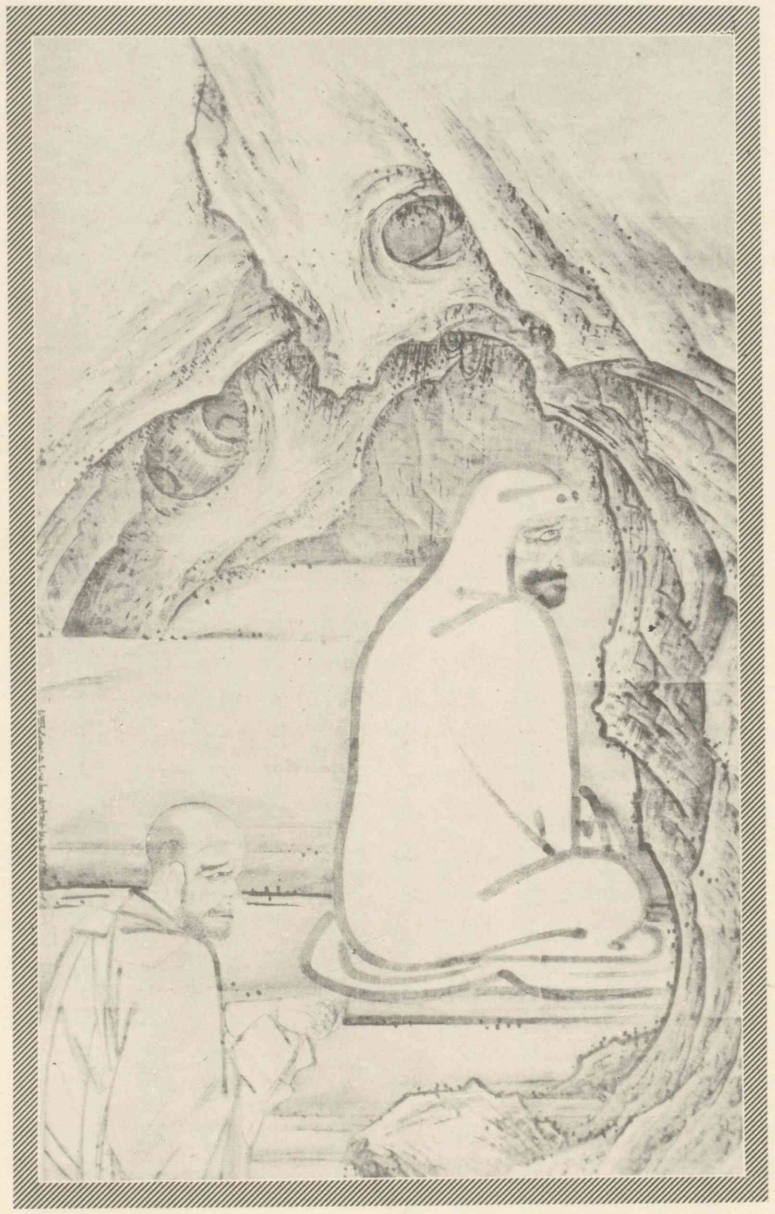
平安朝に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れり。

佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。

法成寺　藤原道長の建てた寺

次に養成したるものにして、今はた西洋交通の歴史によりて、これを合一せんとする傾向あるなり。

我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは、多言を要せず。眞の美術の歴史といふは、聖德太子の佛教興隆に始まり、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於いてこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だ之れに伴はず、平安朝に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は、他に類例を見ず。佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺、法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡くしゝ狀態は、歴史の傳ふると



惠可斷臂　（雪舟筆）

雪舟

雪舟は室町東山時代の畫僧で、氏は小田、名は等楊。備溪齋、米元山主、雲谷等の別號がある。備中國都窪郡赤濱の人で、十三歳の時同國井山の某寺に入つて出家し、京都相國寺に移つては、畫僧周文に就いて繪を學んだ。應仁元年畫道研究のため明國に渡つたが、前人の遺墨と大陸の雄大な自然とは、驚くべく雪舟の天才を大成せしめて、尊大な支那人をさへ感嘆せしめるに至つた。彼れは需に應じて燕京の禮院中堂の壁畫を描き、又富士、三保、清見の三絶景を描いては、その技に驚嘆せしめたると共に、わが風景の明媚を彼の地に紹介したと云はれる。滯明三年、文明元年に歸朝、諸方の寺々に轉住し、永正三年石見國乙吉村の大喜庵で歿した。年八十七歳。

こゝに掲げた惠可斷臂は有名な傑作で、尾張國齋年寺所藏の國寶である。達磨大師の高弟惠可禪師が、悟道の成らざるに發憤し、自ら臂を斷つて師に見えたところで、彼れは顧みたる師の言下に大悟徹底したと云はれる。「八方睨みの達磨」とも稱せらるゝ、雪舟が最大傑作の一つである。

法勝寺
白河天皇の創建、應仁の亂後廢址となつた。

鳳凰堂
山城國宇治

平治物語繪卷
現存三卷。畫は住吉慶恩、詞書は藤原家隆なりといふ。

圓光大師畫傳
僧源空の生涯を畫物語としたもの、今に存する鳳凰堂を見ても、其の一端を覗ふべし。香煙徐ろに薫じて幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池に浮かんで笙鼓月に冴え、嚬伽の袖は庭前に飜りて、舞容風に堪へず。恰もこれ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。かくの如き場に用ゐる畫像なれば、彩華炫耀丹碧映射、其の色は珊瑚水晶を碎き、其の線は黃金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十分に濃く、あくまで鮮かに、精を窮め微を闡きて、後世の乾枯洒脫なるものとは全く選を異にしたること、想見するに足れり。

鎌倉時代の繪卷物もまた日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪爭の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運に從ふ。いづれも時代の反映にして、又不朽の逸品たるを失はざれども、內容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪

の、四十八卷

僧雪舟　貴僧。名は等楊備中の人渡明し、歸朝後周防山口の雲谷寺に住んだ。

色を棄てゝ筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬憺、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益益味はうて益ゝ

畫にして、僧雪舟の作其の尤たり。此の革新は禪宗の提撕により て成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより漸く養ひ來れる勢力の、こゝに頂點に達したるものにして、香茶の技と榮枯を共にせり。抑〻平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼れ此れ別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して寂靜の境に入れば、物の美醜も目を遮らず、一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。例へば能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫もこれに同じく、色を棄てゝ筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬憺、破墨一掃して遠山を產み、禿筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、ます〳〵味はうてます〳〵趣あり。恍惚として吾我を忘る。卽ちこれ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。

趣あり。恍惚として吾我を忘る。

狩野　狩野正信に起こり、元信の大成した一派

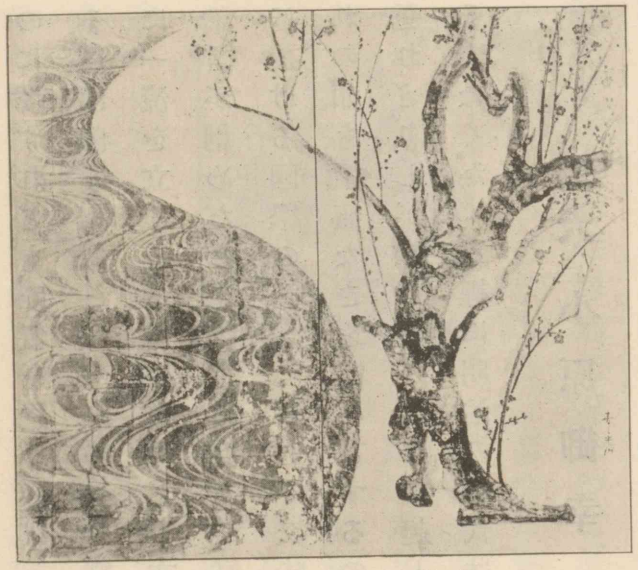
住吉　土佐派の一派鎌倉時代の住吉慶恩に起こるといふ。

光琳　姓は尾形京都の人

一蝶　姓は英（はなぶさ）大阪の人

菱川師宣　號は友竹安房の人

桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫もやゝ移りて雄大穠麗の風を喜びしといへども、いまだ東山の根據を衝くに及ばざりき。



尾形光琳畫（梅と水）

江戸時代に至つて、幕府が消極の方針は、更に其の規模を縮めて枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴きに誇れる狩野、住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳、滑稽の才ある一蝶あり、菱川師宣以來の浮世繪が時世粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしと雖も、鄙俗に流れて、遂に高尙なる趣味に應ずる

大雅　姓は池野、德川時代後期の畫家
應擧　姓は圓山、德川時代後期の畫家
訥言　德川時代後期の畫家、姓は田中
容齋　姓は菊池　名は武保　明治十一年歿　年九十一

能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比するに、全然別種のものに屬すれども、匠氣を忌み、形似を疎にし、氣韻生動を第一義とする所は卽ち相似たり。應擧等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、亦淸淡洒脫の習を脫するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、容齋が好める歷史畫の如きは、卽ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、又時勢の反響なり。但し此れは彼れの如き價値なきを憾みとするのみ。一派又一派、各〻盛衰の數を免れざりしが、未だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せる者なく、かゝる裡に明治の昭代は來たれり。

（『東圃遺稿』）

法皇　後白河法皇
文治　後鳥羽天皇の御代
建禮門院　高倉天皇の中宮　平淸盛の女德子　安德天皇の御生母

一六　小原御幸

（平家物語）

かゝりし程に、法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の小原の閑居

此の一章では、『平家物語』に特有の句讀法を參酌した。

小野の皇太后　關白藤原敎道の女歡子、後冷泉帝の皇后
淸原の深養父　歌人　淸少納言の祖父
補陀樂寺　靜原の山麓
遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるる。

の御住居、御覽ぜまほしう思召されけれども、二月、彌生の程は嵐はげしう、餘寒も未だ盡きず、峰の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、小原の奧へ御幸なる。

後白河法皇

忍びの御幸なりけれども、供奉の人々には、德大寺、花山ノ院、土御門以下、公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通りの御幸なりければ、かの淸原ノ深養父が補陀樂寺、小野の皇太后宮の舊跡叡覽あつて、それより御輿にぞ召されける。

遠山にかゝる白雲は、散りにし花のかたみなり、青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜まるゝ。頃は卯月二十日あまりの事なれば、夏草のしげみが末を分け入らせ給ふに、始めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡たえたる程も思召し知られてあはれなり。

寂光院
大原村草生
天台宗延暦寺の
別所

蔓破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ。

西の山の麓に一宇の御堂あり、すなはち寂光院これなり。ふるう造りなせる泉水木立、よしある樣の所なり。蔓破れては霧不斷の香を燒き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐとは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂りあひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、裏紫に咲ける色、青葉まじりの遲櫻、初花よりも珍らしく、岸の山吹咲き亂れ、八重立つ雲の絶えまより、山時鳥の一聲も、君の御幸を待ちがほなり。法皇これを叡覽あつて、かくぞあそばされける。

建禮門院

池水にみぎはの櫻ちりしきて
波の花こそさかりなりけれ

軒には蔦、朝顏はひかゝり、しのぶまじりのわすれ草、瓢簞屢〻空し、草顏淵が巷にしげし、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも謂ひつべし。

峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらがおとづれならでは、まさきの葛、青つづら、來る人稀なる所なり。

ふりにける岩の絶間より、落ち來る水の音さへ、ゆゑびよしある所なり。綠蘿の垣、翠黛の山繪にかくとも筆も及び難し。さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒には蔦、朝顏はひかゝり、しのぶまじりのわすれ草、瓢簞屢〻空し、草顏淵が巷にしげし、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも謂ひつべし。杉の葺き目もまばらにて、時雨も霜も置く露も、洩る月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後ろは山、前は野べ、いさゝ小篠に風さわぎ、世に立たぬ身の習ひとて、憂きふししげき竹柱、都の方のおとづれは、間遠にゆへるませ垣や、わづかに言問ふものとては、峰に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これらがおとづれならでは、まさきの葛、青つゞら、來る人稀なる所なり。

法皇、「人やある、人やある」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。やゝあつて老い衰へたる尼一人參りたり。「女院はいづくへ

捨身の行
捨身他生必生二淨國一（藥無量壽經）

御幸なりぬるぞ」と仰せければ、「この上の山へ花摘みに入らせ給ひて侍ふ」と申す。「さこそ世を厭ふ御習ひとはいひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや、御いたはしうこそ」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒十善の御果報の盡きさせ給ふに依つて、今かゝる御目を御覽ぜられ侍ふにこそ。捨身の行に、なじかは御身を惜ませ給ひ侍ふべき。因果經には、欲知過去因、見其現在果、欲知未來果、見其現在因と說かれたり。過去未來の因果を、かねて悟らせ給ひなば、つやゝ〳〵御歎きあるべからず。昔悉達太子は、十九にて伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木葉をつらねて膚を隱し、嶺に上りて薪を採り、谷に下りて水を掬び、難行苦行の功に依つてこそ、遂に成等正覺し給ひき。」とぞ申しける。

この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを、結び集めてぞ着たりける。あの有樣にても、かやうの事申す不思

故少納言
俗名藤原通憲

紀伊ノ二位
紀伊守藤原範元の女朝子
藤原通憲の妻
後白河法皇の御乳母

議さよと思召して、「抑も汝はいかなる者ぞ」と仰せければ、この尼さめ〴〵と泣いて、しばしは御返事にも及ばず。やゝあつて涙をおさへて、「申すにつけて憚り覺え侍へども、故少納言入道信西が女、阿波の內侍と申す者にて侍ふなり。母は紀伊ノ二位、さしも御いとほしみ深うこそ侍ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へ

ぬる程思ひ知られて、今更せむ方なうこそ侍へ」とて、袖を顏におし當てゝ、忍びあへぬ樣、目も當てられず。法皇、「げにも汝は、阿波の內侍にてあるござんなれ」。「御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿殿上人も、不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけりとぞ、各〻感じあはれける。

さて彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつつ、外面の小田も水越えて、鳴立つ隙も見えわかず。扨女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。障子には、諸經の要文ども、色紙に書いて所々におされたり。その中に大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけむ、「笙歌遙かに聞こゆ孤雲の上、聖衆來迎す落日の前」とも書かれたり。少し引きのけて、女院の御歌とおぼしくて、

一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左に普賢の繪像、右に善導和尚、並に先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。

思ひきや深山の奧にすまひして
雲井の月をよそに見むとは

さて傍らを叡覽あるに、御寢所と覺しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなんど掛けられたり。さしも本朝漢土に妙なるたぐひ數を盡くし、綾羅錦繡のよそほひも、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、まのあたり見奉りし事ども、今のやうに覺えて、みな袖をぞしぼられける。やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣着たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、下りわづらひたるさまなりけり。法皇、「あれはいかなるものぞ。」と仰せければ、老尼涙をおさへて、「花篋臂にかけ、岩躑躅取り具して、持たせ給ひて候ふは、女院にてわたらせ給ひ侍ふ。爪木に薇折

妙文、九帖の御書も置かれたり。

鳥飼の中納言
藤原盛國の子
大納言の佐の局
平重衡の室

宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露も繁くして、しぼりやかねさせ給ひけむ。

芳宜園
國學者
橘千蔭
通稱は加藤又左衛門

りそへて持ちたるは、鳥飼の中納言惟實が女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐の局」と申しもあへず泣きにけり。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿殿上人も、みな袖をぞ濡らされける。

女院は、世をいとふ御ならひといひながら、今かゝる有樣を見え參らせむずらん恥かしさよ、消えも失せばやと思召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、むすぶ袂もしをるゝに、曉起きの袖の上、山路の露も繁くして、しぼりやかねさせ給ひけむ、山へも歸らせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼參りつゝ、花篋をば賜はりけり。

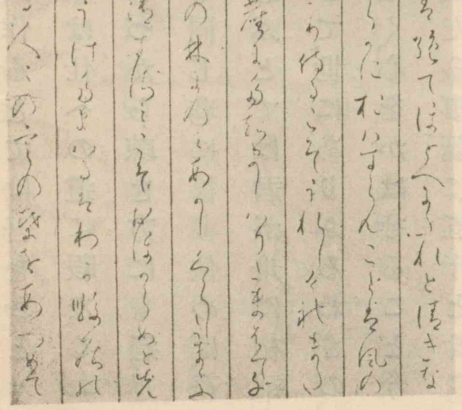
一七　芳宜園大人の靈を祭る

村田春海

號は芳宜園
文化五年歿
年七十五

村田春海
國學者
通稱は平四郎
號琴後翁
文化八年歿
年六十六

雲居の雁のゆきかひは絶えて程へにたれど清き渚によるる波のたひらかにおはすらんことは風の音のほのかに聞きわたり待ることそうれしけれまたこの年頃は巷の塵に立ち交はりたまはで千世の古道ふみわけて詞の林にのみあかし暮らしたまふとよさるはみやびたる御すさみこそ多からめと先はゆかしうなんこの頃承るはわが縣居の翁の手ぶり



村田春海筆蹟

茲に文化の五年九月八日、平春海謹みて、芳宜園の大人の奥津城の御前に菊の花一枝をたむけ、香の木一ひらを焚きて、うなねつきて申さく、あはれ悲しきかも、君は我れに十といひて一年のこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は正に盛りの齡におはして吾れはまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、あしたにまゐるとては君のみはかしのしりへに從ひ、ゆふべに罷るとては君の御袖のもとに縋りて、相うるは

を慕へる人々の言の葉を集めて。

縣居
加茂眞淵
號縣居
明和六年歿
年七十三

しみまつれること、親子はらからにも何か異ならん。書讀むとては君を師とも尊み、歌作るとては吾をおとゞひの列にぞ數へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、吾れは世のさがにかゝづらひて、おのづから疎き方にも過ぎつるを、君仕へをしぞき給ひて後は、吾れも同じ巷に移り住めば、花を尋ぬとては吾れ道しるべをなし、月を思ふとては君が舟に相乘り、憂き事も共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざの、まめごとも、あだごとも、かたみにへだてなく、心をかはせること今に二十年、その初めを繰返し數ふれば、相友たる事既に五十とせにぞ餘りける。さるを今後れ奉りて、いつの世にか相見ん、何れの時にかことゝはん。常なきは人の身の習ぞと知るも、これをいかでか歎かざらん、かゝるを誰れかはよく堪へん。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に下り

くひぜを守り
韓非子に出でたる故事
宋人有二耕レ田者一田中有レ株兎走觸レ株折レ頸而死因釋二其耒一而守レ株冀二得レ兎兎不レ可二復得一而身爲二宋國笑一

舟にきだつくる
呂子春秋に出でたる故事
楚有二涉レ江者一其劍自二舟中一墜二于水一遽刻二其舟一曰是吾劍所二從墜一也舟止從二其所レ刻處一入レ水求レ之舟已行矣而劍不レ行求レ劍若レ此不二亦惑一乎

藤原
持統文武の御代

ゆけるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてゝ古に復り、青雲の高き心しらひを求め、倭文機の文あるみやびごとを貴みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥みこゝにひかれて、尙ほ怪しみとがむる類ひ多く、たまあひてよくうけひく人なん稀なりしを、君獨り心を起こして普く諭し、廣く誘ひしより、近き人は目のあたりあひうづなひ、遠き人ははるかに靡き來て、古ぶりの歌世に盛りになりにたるは、まことに君の力によりてなり。

その自ら詠みいで給へる歌を見るに、古き調、新しき姿、とり〴〵に備はらざるはなし。その古を寫せるは藤原、寧樂の御世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河、鳥羽の御時に下らず。心に思ふ事は口に盡くさざることなく、目に觸るゝものは言葉に載せざることなんあらざりける。これを見て、たかきもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人はその名を君に知られては、身の面

おこしと思ひて世にも誇り、君の一歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ深く喜びける。

然るを今、黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞こえずなりぬるは、わがどちの歎きのみかは、大方の世の人の憂ともいひつべし。これをいかでか惜しまざらん、かゝるを誰れかは慕はざらん。あはれ悲しきかも。わがかく言擧するを泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに見そなはせとなん申す。

（琴後集）

一八 世界の四聖 その一

高山林次郎
評論家
文學博士
號は樗牛
山形縣の人
明治三十五年歿
年三十三

一代の宗師
百代の儀表

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰れかこれを能くせんや。釋迦、孔子、ソクラテース、キリストの四人、世呼んで世界の四聖となす、宜なるかな。

人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。

跋提河
ガンジス河の支流

徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。父は淨飯王、母は麻耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生れたれども、夙に思を人生の問題に潜め、二十九の歳その妻子を捨てゝ王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むること六年、遂に人生の奥義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。

高山林次郎

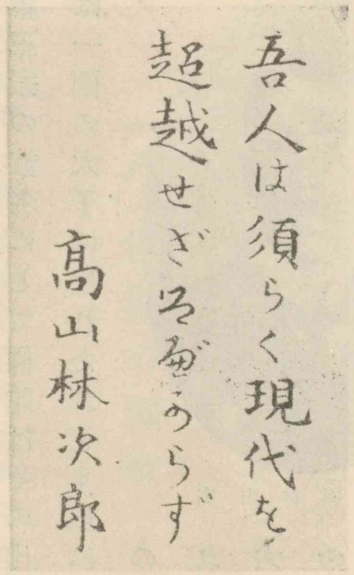
蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と

幽玄なる談理と憺慘たる苦行。

一世の元々をして、歸命の大道に就かしむ。

浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となる。

慘憺たる苦行とによりて安心の道を求めたり。その流派を樹て相爭ふところは、畢竟名目の優劣のみ。未だ一世の元々をして、歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、その浩大なる慈悲と無邊なる智惠とを以て一世の木鐸となり、民をしてその歸依するところを知らしめたり。



高山林次郎墓銘

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢んでられて大司寇の職に就く。治績大いに擧がり、內外その

君臣の大義は蕩然として地を拂へり。

教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。

風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ゐざらしむ。孔子時運の非なるを見、五十六歲の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて、四方の遊說を試みぬ。

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣としてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。强は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子すでに志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に

孔子（渡邊崋山筆）

大義明分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。

老脚蹉跎として再び魯に歸る。

子貢　衛の人　孔門十哲の一人

Socrates (470–399B.C) Athensai　ギリシヤの首府

廻らさんとす、志や高且つ大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於いて已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我れを知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

ソクラテースはギリシヤのアテネ府に住める一彫刻師の子なり。その生れたるは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆んど時を同じうして世に出でたるは奇なりといふべし。ギリシヤの當時は

知識は名目の爭ひに止り、道德は空文の上にのみ貴ばれる。

道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。

辯難攻擊して一歩も假借せず。

侃諤の正議稀代の雄辯。

いはゆる詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭ひに止まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、其の知識道德は人生社會の實際に關して、殆んど裨益するところなかりき。ソクラテース慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず、詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず、侃諤の正議、その稀代の雄辯と相伴ひて一世を風靡せり。然るに「喬木は風に折らる」といふ喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざるもの相計りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を刱め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法によりて死刑に處すべし。」と。ソクラテースはこの讒訴に對して抗議せり。而して其の抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠

語々百世の眞理

予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。

Asklepios 醫藥の神

を以て國民に訴ふるところ、言々語々百世の眞理ならざるはなかりしが、判官はソクラテースを以て傲慢不遜なりとして、遂に死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。其の獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死、靈魂、未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輙ち答へていはく、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで死す。其の將に死せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテースいはく、「爾一鷄を以てアスクレピオスの神に捧げよ。」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。ギリシヤの聖人ソクラテースはかくの如くして逝きぬ。年七十。

釋迦

Christ
Jesus
Judea
Bethlehem エルサレムの南八粁餘
Joseph
Maria

ローマ帝國の榮華正にその極に達したる時にして、禍亂の萌芽已にその中に胚

キリストは本名を耶蘇といふ。キリストとは「膏灌がれたる者」といふ義にして、教徒の奉りたる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生る。その生後四年を以て西曆紀元第一年となす。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間、ユダヤの各地を歷遊し、諸々の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。

抑〻當時はローマ帝國の榮華、正にその極に達したる時にして、禍亂の萌芽已にその中に胚胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なかりき。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、

胎し、災異荐りに至りて、天下寧日なかりき。

遠近靡然としてこれに赴く。

異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。是に於いて、一世の人心は悉く偉人の現出してこの暗黑の社會を照破せんことを渴望せり。キリストこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近靡然としてこれに赴く。僧侶、學者、官吏等、これを喜ばず、以て猥りに新法異說を唱へて民を迷はすものなりとなし、キリストを捕へて磔殺の刑に處す。キリスト既にこの事あるを豫期し、晏然として騷がず、靜かに祈りていはく、「神よ、彼等を許せ。彼等はその爲すべきところを知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エルサレムの女子よ、吾が爲めに哭くことなかれ。たゞ己れと己れの子との爲めに哭け。」と。かくの如くしてキリストは三十三年の短命を以て十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘む。キリスト教卽ちこれなり。

蟋軻不遇の一生

經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿す。

一九　世界の四聖　その二

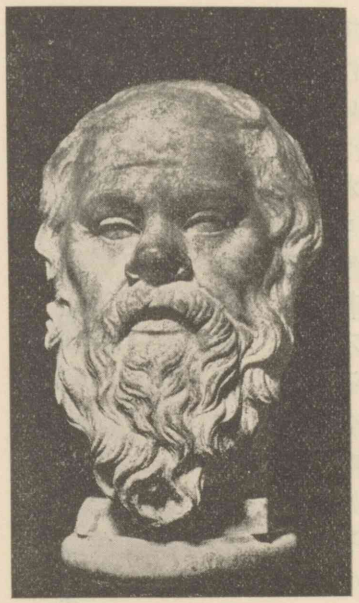
高山林次郎

以上は四聖の略傳なり。その人物、事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも蟋軻不遇の中にその生を終へたり、孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔殺せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れどもこれらの人々の志すところは天下後世に在り、現世の禍

その死に就くや、晏如として猶ほ歸するが如し。

嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故にその死に就くや、晏如として猶ほ歸するが如し。孔子はその身の不幸を憂へずして、却つて「吾が道行はれずんば、吾れ何を以てか後世に見えん。」と嗟歎せり。釋迦は衆生の爲めにその妻子と王位とを拋ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは死罪の脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものに取りて、死はた何爲るものぞ。吾れをして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷を覺まさざるべからず。」と。キリストは己れを罪に陷るゝ者の爲めに神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。



スーテラクソ

釋迦の教―煩惱を斷滅して、涅槃に達す。

「我」の一念を脫却して、無我無心の境界に達す。―これ人生究竟の樂地にして涅槃是れ也。

孔子の教――修身、齊家、治國、平天下。

四聖はその生れたる所と時とを異にせり。故にその教理にもまた多少の差違なきを得ざりき。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ人生は苦に始まりて苦に終はる。生老病死いづれか苦に非ざるべき。故に吾人は現在を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執着するに在り。故に吾人は「我」の一念を脫却して、無我無心の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平らかにするに在り。而して身を修むるの基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生れながらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質に

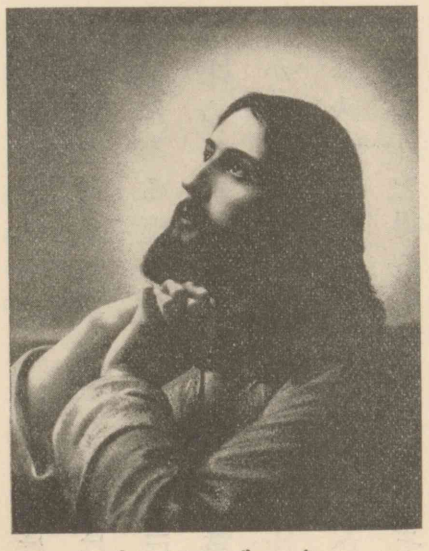
よりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要是に於いてかあり。既に教育を受けて身既に修まらば、家自ら齊ふべく、家齊はゞ、國自ら治まるべく、國治まらば天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教は一身の修養に始まり、治國平天下に終はるものと見るを得べし。

ソクラテースの教—知德合一。

ソクラテースの教は、いはゆる知德合一說なり。以爲へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとは、もと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識、道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義おのづからその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して靈魂は肉體と異なりて、不朽不滅なるものなり。故に人の正義を行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲めに存せず、然れども富貴は道德の中に在り。」と。

正義は靈魂の滿足なり。

キリストの教は愛の教なりと稱せらる。謂はゆる山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。いはく、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰められるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の淸きものは福なるかな、その人は神を見ることを得べければなり。惡にしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に敵することなかれ。人若し汝が右の頰を打たば、左の頰をも轉ら



キリスト

求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。

見せんが爲めに義をその前に行ふこと勿れ。右の手に爲すところを左の手に知らしむることなかれ。僞善者の行ひに倣ふこと勿れ。隱れたるを鑒給ふ神は、顯はに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非すること勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざるや。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に到る門は其の路は大きく、これに入るものは多し。嗚呼、いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少なきぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリスト教の精髓は、後世の人いかなる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓の外に出でず。

かくの如きは四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いて幾千年ぞ。而してこの教の、今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なる、それ何を以てかこれに比せんや。

（『樗牛全集』）

二〇　船　旅

（土佐日記）

男もすといふ日記といふものを、女もして試みむとてするなり。それの年十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいさゝか物に書きつく。

ある人、縣の四年五年はてゝ、例の事ども皆し終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乘るべき所へわたる。かれこれ知る知らぬ送りす。年頃よく具しつる人々なむ、別かれ難く思ひて、頻

りにとかくしつゝ、罵るうちに夜ふけぬ。

（正月）七日になりぬ。同じ港（大湊）にあり。今日破子もたせて來たる人、その名などぞや、今思ひ出でむ。この人、歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、浪の立つなることと、憂へいひて詠める歌、

その名などぞや、今思ひ出でむ。

ゆくさきに立つ白浪の聲よりも
おくれて泣かむ我れやまさらむ。

いと大聲なるべし。もてくる物よりは、歌はいかゞあらむ。

とぞよめる。いと大聲なるべし。持てくる物よりは、歌はいかゞあらむ。この歌を、これかれ哀れがれども、一人も返しせず。しつべき人も交れゝども、これをのみいたはり、物をのみ食ひて、夜ふけぬ。この歌ぬし「又まからず」といひて立ちぬ。ある人の子の童なる、密かにいふ「まろ此の歌の返しせむ。」といふ。驚きて「いとをかしき事かな。詠みてむやは。詠みつべくは、はやいへかし。」といふ。「罷らずとて立ちぬる人を待ちて詠まむ。」とて求めけるを、夜更けぬとにや、やがて往にけり。「抑もいかゞ詠んだる」と、いぶかしがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず。強ひて問へば、いへる歌、

かくはいふものか。愛しければにやあらむ。いと思はずなり。

ゆく人もとまるも袖の涙川
みぎはのみこそぬれまさりけれ。

となむ詠める。かくはいふものか。愛しければにやあらむ。いと思はずなり。童言にては何かせむ。媼翁にをしつべし。惡しくもあれ、いかにもあれ、便りあらば遣らむとておかれぬめり。

二十日。昨日のやうなれば、船いださず。皆人々憂へ歎く。苦しく心もとなければ、唯だ日の經ぬる數を、今日いくか、二十日、三十日と數ふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。いも寢ず。

二十日の月出でにけり。山の端もなくて、海の中よりぞ出で來る。かやうなるを見てや、むかし安倍の仲麿といひける人は、唐土に渡りて、歸り來ける時に、船に乘るべき所にて、かの國人馬のはなむけし、別かれ惜しみて、かしこの詩つくりなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。これを見て、仲麿のぬし、我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神も詠んたび、今は上中下の人も、かやうに別かれ惜しみ、悅びもあり、悲しみもある時には詠むとて、よめりける歌、

月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。

あをうな原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山にいでし月かも。

とぞ詠めりける。かの國人、聞き知るまじうおもほえたれども、事のこゝろを男文字にさまを書き出だして、こゝの詞傳へたる人に、いひ知らせければ、意をや聞き得たりけむ、いと思ひの外になむ愛

でける。唐土と此の國とは、ことば異なるものなれど、月の影は同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

二月五日。けふ辛くして、和泉の灘より、小津のとまりをおふ。松原目もはるゞ〳〵なり。これかれ苦しければ、詠める歌。

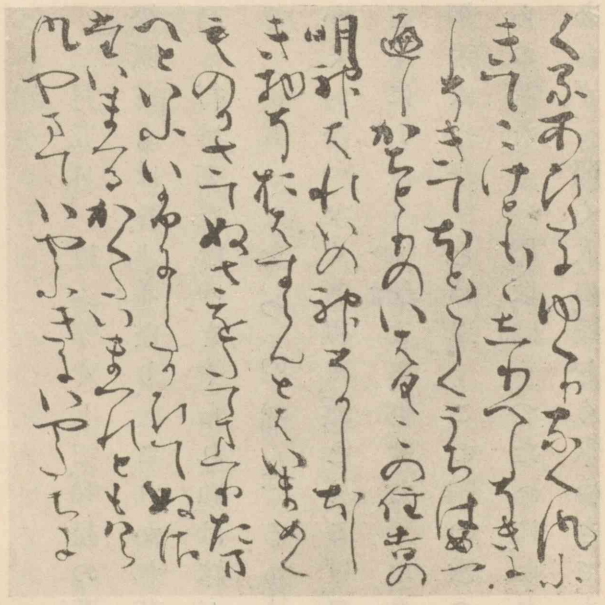
行けどなほゆきやられぬは妹がうむ
をつの浦なる岸の松原。

かくいひつゞくる程に、「船とくこげ、日の好きに。」と催せば、檝取船子どもにいはく、「御船より仰せたぶなり、あさぎたの出で來ぬさきに、綱手はやひけ。」といふ。この詞の歌のやうなるは、檝取のおのづからの詞なり。檝取はうつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず。聞く人の、怪しく歌めきてもいへるかなとて、書き出だせれば、げに三十文字あまりなりけり。

しぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし。

「ほしき物ぞおはすらむ。」「とは今めくものか。」「さて幣を奉り給へ。」

今日波な立ちそと、人々終日に祈るしるしありて、風浪たゝず。



藤原定家筆

今し鷗むれゐて遊ぶところあり。京の近づくよろこびの餘りに、ある童のよめる歌。

祈りくる風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらむ。

土佐日記

かくいひ眺めつゞくる間に、ゆくりなく風吹きて、こげども〳〵尻へしぞきにしぞきて、ほと〳〵しくうちはめつべし。

機取のいはく、「この住吉の明神は、れいの神ぞかし。ほしき物ぞおはすらむ。」「とは今めくものか。」「さて幣を奉り給へ。」といふ。いふに隨ひて、幣たいまつる。かく奉れども、もはら風やまで、いや吹きに、いや立ちに、風波の危ければ、機取またいはく、「幣には御心のいかねば、御船も行かぬなり。なほうれしと思ひ給ふべき物奉りたべ。」といふ。またいふに隨ひて、「いかゞはせむ」とて、眼もこそ二つあれ、ただ一つある鏡を奉るとて、海にうちはめつれば、くちをし。さればうちつけに、海は鏡のおもてのごとなりぬれば、ある人のよめる歌、

ちはやぶる神の心のあるゝ海に鏡を入れてかつ見つるかな。

いたく、住の江、忘れ草、岸の姫松などいふ神にはあらずかし。目もうつらく、鏡に神の心をこそは見つれ。機取の心は、神の御心なりけり。

千葉龜雄
評論家
東京日日新聞
社顧問
號は江東
山形縣の人
明治十一年生

寫實主義

小說神髓

二一　現代の文學

千葉龜雄

我が國現代文學の源流を極めようとすれば、どうしても明治二十三年から二十一二年代まで遡らねばならぬ。二葉亭四迷、山田美妙、尾崎紅葉、森鷗外、幸田露伴、廣津柳浪等の諸作家が始めて文壇に現はれて、各〻特殊の個性を發揮した清新な處女作を發表し、眞の文學とはいかなるものか、また來るべき日本文學はいかなる形式のものであらねばならぬかを示したのが、實にこの時代であつたからである。而して、是等の作家の傾向は、大體寫實主義と呼ばるべきものであつた。其の中には或は紅葉、露伴の初期の作物の如く、專ら西鶴あたりの寫實小說から其の手法や技巧を學んだものもあつた。或は坪內逍遙が明治十八年に『小說神髓』を著はして、藝

術の本質を始めて理論的に闡明し、在來とは全く違つた文學の考へ方を示した、それらの所說に導かれて新しい道に進んだものもあつた。或は歐洲文學に對して直接に深き知識を持ち、その精神を我が國に移さうとして忠實に努力した者もあつた。二葉亭四迷の露文學に於ける、森鷗外の獨、墺文學に於けるが如きは、この最後の場合の最も著しき例である。要するに我が寫實主義は大體に於いて歐洲の同じ主義の流れを汲んだものであるが、其の頃移植された寫實主義を始めとして、それより今日に至るまで、我が文壇に流行した諸〻の主なる思潮が、歐洲文壇のそれと常に起伏を同じくして居るのは、興味のある現象と云はねばならぬ。

千葉龜雄

寫實主義
あるがまゝの相を、あるがまゝに認め、その實象をつとめて忠實に描き出さうとする主義である。

簡單にいへば、我が近代文學の潮流は、明治二十一二年代に於いて、始めて世界文學の潮流に仲間入をしたといつても、强ち誇張ではないであらう。然らば謂はゆる寫實主義とは何かといふと、それはあるがまゝの相（すがた）を、たゞあるがまゝに認め、その實象をつとめて忠實に描き出さうとする主義である。それ故、此の主義の作家は題材を奇拔なものに求めずして、却つてありふれた社會の事實を取扱つた。例へば、紅葉が女性の種々相を描いて、性情の自然なる發展を寫すことに力を入れたる如きが、その一つの現はれである。かくして、人間の心理や事物の姿趣を出來るだけ微細に描き出だす必要が起こると共に、此の要求に伴はぬ文章體の文章が次第に小說から離れて、言文一致體が採用せられて來たのは、もとより當然の趨勢といはねばならぬ。

その間に明治女流作家の第一人者たる樋口一葉と、神祕小說の

天外の新寫實主義
天外のいふところは、人生そのものに善惡美醜の定まつた本質があるのではない。小說はたゞあるがまゝの實世間を、正直に丁寧に筆記すればよいといふのである。

Emile Zola.
(1840—1902)
エミール、ゾラの自然主義から、モーパッサン、フローベルの自然主義へ。

創意を拓いた泉鏡花とが現はれたが、寫實主義は明治三十年代を止りとして、下り坂になり、小杉天外が佛國十九世紀後半の自然派の主張を採り入れ、新寫實主義を唱へるに至つて、我が國の文壇は、始めて自然主義時代の前期に入つた。天外のいふところは、人生そのものに善、惡、美、醜の定まつた本質があるのではない、小說はただあるがまゝの實世間を、正直に丁寧に筆記すればよいといふのである。これを以前の寫實主義に比べて主なる相違は、作者の主觀的な物の觀方を排して、たゞ嚴肅な技師として、忠實に人生を映寫すべきことを唱へたところにある。これは專ら佛國のエミール、ゾラの傾向を學んだものであるが、永井荷風は『地獄の花』の一篇によつて、之れに對する共鳴を現はして居る。

思ふに歐洲に自然主義の發生した原因は、十九世紀後半に於ける自然科學の勃興にあつた。即ち自然主義は、從來の浪漫主義、理

Guy de Maupassant.（1850—1893）

Gustave Flaubert　フランスの小說家（1821—1880）

花袋、藤村の自然主義　人生には官能で經驗する事以外に、眞實なるものがない。官能の前には、たゞ眞と僞とがあるだけで、善惡、美醜といふものはあり得ない。世間がいかに醜惡と考へるものでも、若しそれが眞實であるならば、冷靜にそれを描いて、一向差支ない。

想主義に反抗して、たゞ實驗と分析とによつて、人生から一定の法則を引き出さうとするものである。故にそれはどこまでも客觀を尊んだ。けれどもゾラが自然主義の主張には、まだ幾分不徹底な所があり、その作物もまた幾分か浪漫的な氣分を加味して居たやうに、天外、荷風の作物も、同じ弊のあることを免れなかつた。而して彼れにつぎ田山花袋、島崎藤村が出るに及んで、始めて自然主義の世紀が完成した。後期自然主義といふべきは、この時代である。花袋は現實暴露、或は露骨な描寫といふ信條によつて、專ら佛のモーパッサン、フローベルの作風に法つた。そのいふところによれば、人生には官能で經驗する事以外に、眞實なるものがない。しかも官能の前には、たゞ眞と僞とがあるだけで善、惡、美、醜といふものが有り得ないから、隨つて世間が、いかに醜惡と考へるものでも、若しそれが眞實であるならば、冷靜にそれを描いて、一向差支ないのである。この主張は、藝術は必ず美を描くべきものだといふ在來の審美觀念を根本から打ち碎いたもので、その結果自然主義といへば、必ず醜惡な人生相ばかりを寫すものだといふ批難を、常識の方面から受けたのは、怪しむに足らぬことである。當時熱心に自然主義を支持し强調した批評家には、島村抱月、長谷川天溪その他の人々があり、又德田秋聲、正宗白鳥、國木田獨歩、岩野泡鳴等、この派の有力な諸作家が、各〻新らしい特色を豐かに見せた製作を盛んに出すやうになつて、自然主義の展開は、殆んどその頂點に達した觀があつた。たゞ運命を人生に於ける不可抗力であるとなし、人生のいかなる努力をも、悉く無効だと見る運命主義の信仰だけは、獨り秋聲、白鳥、獨歩のみにあつて、花袋、藤村の曾て示さなかつた自然主義の一面であつたが、かく初めから人生の努力を否定し、反抗の無力を肯定するが故に、彼等の作物は、すべて絶望的、虛無的で、

秋聲、白鳥、獨歩の自然主義　運命を人生に於ける不可抗力とする一種の運命主義。

夏目漱石の作に於ける明色と、倫理的意識と、東洋趣味の冲澹と。

從つて、光を缺き、感激を失ひ、苦澁にして灰白な色調に滿つることになつたのである。

こゝにたゞ一人、この滔々たる大勢の外に超越し、最後まで自分の個性を護り通して、異彩ある作物を數多く產出した作家に夏目漱石がある。漱石の才能は多角多樣で、內容により自由に形式を變化して行つたので、一つの主義を以て容易に彼れを律することが出來ぬ。たゞ彼れはいかなる傾向を擇ぶにしても、常に自然主義の行き方とは違ひ、時としては正反した。恐らく彼れの最も優れた傾向は、英國派心理小說の脈絡をひいた作物にあるであらうが、何にせよ、彼れの作が、その明色と、倫理的意識と、東洋趣味的の冲澹とが相俟つて、自然主義の暗色から救はれようと欲する讀者に、多大の慰安を與へる力を有つてゐたのは爭はれぬ事であつた。

自然主義の衰潮は、大正の初期に於いて著しく目立つて來た。

耽美派の谷崎潤一郎

ポーの神祕とボードレールの頽廢味とを一つにした作家

Edgar Allan Poe.
(1809—1849)
米國の詩人

Baudelaire
フランスの詩人
(1821—1867)

そしてこれは歐洲に於いても、丁度自然主義の末期に迫つた時で、そして人生の些事や、機械的な運命觀のみに停滯して居る自然主義に反抗して、人間の生命力を高潮する現實主義の叫びが到る所に聞こえて來た時であつた。我が國で、この現象を啓蒙的に說述した厨川白村の『近代文學十講』が、忽ち數十版を重ねた事によつても、當時の我が讀書界が、文壇に對していかに新しい轉回を望んでゐたかが知られるであらう。

しかしながら、我が自然主義全盛期にあつても、それと色彩を異にした藝術が全く影を潛めたといふわけではない。例へば、谷崎潤一郎の如きは、日本人には珍しい異常感覺の追求によつて、新に耽美派の一面を拓いた。彼れは米のポーの神祕と佛のボードレールの頽廢味とを一つにした作家といはれ、また浪漫的色彩を最も明らかに示した作家といはれた。けれども當時の文學思潮の傾

白樺派の新理想主義
白樺派の人生に對する態度は、どこまでも肯定であり、積極であり、人類の將來は、一に人類內部生命の飛躍によつて、限りなき幸福に導かれるといふのが彼等の信念である。

Leo Tolstoy
ロシアの小說家
思想家
(1828—1910)

Mikhailovich Dostoiev-ki
ロシアの小說家
(1822—1881)

Sir Rabindranath Tagore
印度の詩人
哲學者
(1861——)

向から見て、正面から自然主義に對抗し、同時に來るべき時代思潮の一面を暗示したものは、どうしても明治四十三年に於ける白樺派の擡頭である。白樺派は貴族生れの武者小路實篤を盟主として志賀直哉、有島武郎等の學習院出身者を中心とし、人道愛と個性、生命力の光明を高調しようとした新理想主義の一團である。人生に對する態度は、どこまでも肯定であり、積極であり、人類の將來は、一に人類內部生命の飛躍によつて、限りなき幸福に導かれるといふのが、彼等の信念であつた。

蓋しかやうな藝術思想が生れて來たのは、主として大正初期に於ける當時の哲學、及び外國文學の感化によつたのであつた。何となれば、明治の末期から大正の初期にかけて、著しい壓力を以て思想界に歡迎せられたものは、露のトルストイとドストエフスキーとの論策、主義、作物であつたが、更に印度のタゴール、佛のロマン、

Romain Rolland
フランスの小說家
(1868——)

Edward Carpenter
英國の思想家
社會改良家
(1844——)

Bertrand Russell
英國の思想家
(1872——)

Rudolf Eucken
ドイツの哲學者
(1846——)

Henri Bergson
フランスの哲學者
(1859——)

純藝術派の現實主義
現實主義は觀照に於いては出來るだけ科學的の

ローラン、英のカーペンター、ラッセル等の思潮が、滔々として流れ入り、その上に獨のオイケン、佛のベルグソンの新哲學が入つて來て、それを補つたからである。要するに、それらの思潮は飽くまでも人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌するものであつて、いかなる點から見ても、自然主義のこの上の存在を可能にするものではなかつたのである。

新理想主義が一方に崛起すると共に、之れと相並んで自然主義派に取つて代はつた純藝術派の諸新人は、皆現實主義の使徒であつた。こゝでもまた我が文壇の行き方が歐洲のそれに一致してゐる。但し寫實主義も、現實主義も、我が國では同じくリアリズムの名で呼ばれて居るが、この二つは意味の全く違つた言葉である。寫實主義は初めから主觀を拔きにして、專ら外面から物象を描かうとするものであるが、現實主義は觀照に於いては出來るだけ科

精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは、飽くまで嚴肅な主觀に於いてしようといふので、我が文壇に於ける現代大多數の作家は、多少の差こそあれ、悉くこの主義によりつゝあるものと見られる。

學的の精確を尊ぶに拘はらず、批判と省察とは、飽くまでも嚴肅な主觀に於いてしようといふもので、我が國文壇に於ける現代大多數の作家は、多少の差こそあれ、悉くこの主義によりつゝあるものと見られる。　菊池寛、芥川龍之介が冷酷な諷刺によつて、人間眞理と現實人生相との矛盾を暴き出だし、里見弴、志賀直哉が精緻なる技巧を以て如實の藝術自然を創造したるが如き、その他の作家いづれも、それ〴〵の個性によつて作物を出して居るが、概して文壇の中心は、現實主義を出ることがない。　しかもこれらの諸作家によつて築かれた現實主義の藝術は、今や多數新進の作家によつて、漸く第二期の轉廻を見ようとして居る。　その轉廻する相の一は、描寫の技巧が前代の作家に比べて、目の覺めるほど纖巧で、微妙で、神經が清新なる事である。　その二は題材の摑み方が驚くべく奇警で、垢が拔け、氣が利いて居る事である。　この點に於いて彼等の

Conte
一種の短篇小說

社會的意識を含んだ藝術の出現。

無產階級の藝術

新傾向は、殆んど佛國文藝の精粹たる「コント」の域に迫るものがあるといはれる。

現代の我が文學について、次ぎに注意すべきは、社會改造の主潮といはるべき社會的意識を含んだ藝術傾向が、新に出現した事である。　一九一四年の世界大戰は、その終局によつて、無數の新思想と新しい社會鬪爭とを惹起したが、中にも產業組織の研究から起こつた無產階級の自覺が、その思想の表現を藝術に求めようとして、謂はゆる無產階級の藝術を生んだ事も、主なる新現象の一つである。　それは我が國にあつては、大正十二年上半期に於いて、隆盛を極めたが、但しそれは徒らに思想宣傳の熱意が强いだけで、藝術的情感が稀薄であるといふのが、之れに對する一般の不滿であつた。　それがいかに大成して行くかは、一に將來に見ねばならぬことであるが、たゞ特に注意すべきは、この無產階級藝術が唱へ出さ

れたのを機會として、現代の我が一般文學に社會意識と時代觀念とを含むことの乏しきを指摘し、その點に於いて藝術局面の新しい轉回を要求する聲の高くなつたことである。

以上は現時に於ける我が國文壇の大勢であるが、更に一二の附記すべきものがありとすれば、その一つは明治末期に於ける坪內逍遙の文藝協會、小山內薰の自由劇場、その他演劇に於ける實際的の啓蒙運動が起源となり、此の數年間に於いて、演劇が著しく我が全交壇の中心興味となり、從つて戲曲の創作に筆を着ける作家が多くなつたことであらう。この趨勢は恐らく年一年と盛んになつて行くであらうが、これもまた我が文壇が歐米文壇と傾向を等しくするものである。たゞ我が國にあつては、その趨勢が後れて現はれた爲めと、一つは新脚本の上場が容易でない爲めに、小說ほどの成長を見ることは出來ないが、既にこの方面にも幾人かの優

坪內逍遙の文藝協會と小山內薰の自由劇場。

秀な作家を出して居り、又その作品には、我が劇文學の先驅として價値あるものが決して少なくないのである。

次ぎに、歐米文學の飜譯の盛んな現狀も、また藝術界一般の要求を示すものといはねばならぬ。今や印刷術の隆昌は、世界いかなる國の文學をも自由に我が國に移植せしめ、國民をして坐ながら世界藝術圖書館の廻廊に立つの感あらしめてゐる。我が文壇がその精を拔き粹を選んで、新しい日本文學を創造し得るのは、果たしていつの日であらうか。いづれにせよ、日本文學が世界藝術の一つの光となり、更にその光が反射して、我が國民の藝術的觀念を向上せしむるのは、何よりも望ましいことである。

橋守部　國學者、歌人　號は池菴　伊勢の人　嘉永二年歿　年六十九

二二　待問

橋守部

人の心よせを失ひ、懷はくを毀ふ。

人の爲めに身を勞き心つくさば、他もまた我が爲めに情をかけ、誠をはこぶべし。

世の活業は、もとよりおの〳〵我が身のために經營むわざなれど、身の爲めになすとおもふ時は、おのづから私事出で、人の心よせを失ひ、懷はくを毀ふ事もありぬべければ、おなじ事も、他の爲めにして、我れは又世の人に養はれんと心得べきなり。他の爲めになすとは、譬へば木匠は、誂へし人のために、良材を選びて、一向に其の家をよく作りまゐらせばやと身を勞き、商賈は、買人の爲めに、よき品を搜置きて、すこしも價廉くしてまゐらせばやと、心盡くすたぐひをいふなり。何事にも、しか人の爲めに身を勞き心つくさば、他もまた我が爲めに情をかけ、誠をはこびて、我が身は世の人よりやしなひて賜はるなり。

ひとたび相知りて、親び始めし人とは、何事ありとも中絶ゆまじき事也。凡そ交會のとゞく限りが、我が身のための世間なれば、人

客人をもてなすには、來し時より歸る時を篤くすべし。

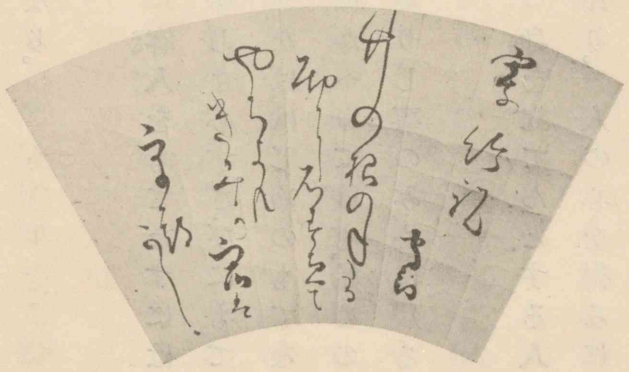
ひとりといへども、中絶ゆるは、わが身の世の中を狹むることわりなり。

客人をもてなすには、來し時より歸る時を篤くすべし。はじめ珍しき心すさびにもてはやすとも、日にそへておろそかになりゆきなば、はじめのもてなしいたづら事となるのみならず、その人家にかへりて後も、始めのよかりしはいつしか忘れて、終はりの惡しかりし事のみ心に殘るものなり。

身を立てんとする人は、勤勞ぎつとむるよりも、人の心を得るにあり。人の心を得るには、誠をつくすにしくはなし。誠を竭くすとは、心の眞實をのみいふにはあらず。たとへば工匠は物をかたくつくり、商人は直を廉く賣るたぐひも、みな世の人に誠をつくす

なり。さるを己が身は勞かずして、かくして人の心を執らん、然して人の懷を得んと謀爲つより、却々疎まれゆくぞおほかりける。

限りもなくものほしみして、我れと我が心を苦しむるこそ愚癡なるわざなれ。　ある商人の家に、雨傘、日笠、雨屐、日履などをあきなへるがありけるに、そのあるじ、日の照りつゞく折は、雨傘雨屐の賣れざるを愁ひ、雨のふりつゞく折は、日笠日履の賣れざるを歎きて、常におもひの休む間もなかりつるを、その家婦諫めていはく、そはわれからの御歎きを反覆にとりかへして、雨降れば



限りもなくものほしみして、我れと我が心を苦しむるこそ愚癡なるわざなれ。

寄竹祝　守部

竹の根のねたる砌に石すゑて八千代も君が宿はうごかじ

橘守部筆蹟

雨傘の賣れぬるを怡び、日旱れば日笠のよく賣れぬるを怡び給はば、御心の憂ひなくしてよからましといひけりとぞ。おほかた世の人の常のものおもひも此のたぐひにて、わが心から嘆くめるぞおほかりける。

重き病人ある時、醫をあまたむかへて藥の方をさだめんは、よきに似てわろし。さては心のうちに斯うしもと思ふふしありとも人に憚りていひも出でず、又互に他のおもひよりをあしともいひかねて、たゞ人聞きよきさまにのみ取りなすより、つひにはおのおの心にもあらぬ藥を與ふるやうになりぬめり。家にゆゝしき事出來たらん時、うからやからゆかりある人多くあつめて、事のをさまりを沙汰せんも、猶ほその如くにて、各思ふふしありとも、輕からぬ事はいひ出でんもつゝましく、此の人は彼の人をかね、彼の人は

此の人をはゞかりて、たゞうはべのみ言よくいひてやみぬれば、はては諺にいふやうに楫子多くて船を覆すたぐひ多し。

楫子多くて船を覆す。

世に悪しき人の多からんは善き人のあらはるゝ祥、奢る人の多からんは約やかなる人の富む兆、懶惰る人のおほからんは勉強む人の成り出でん瑞なり。されば、ひたぶるに身を立てんと思はん人は、殊更にさる人の多からん里をえらびて、いとなみ勤むべし。必ず家を起こし身を立てなむものぞ。しかるを此の里は人心あしなどいひて、それをいとふらん人は、己れもそのあしきにくみするかたあるゆゑなり。

よろづ具足はりて能き人は、むかしも今も有り難し。

梅は香の美しきを愛でて、枝のとげ〳〵しきをきらはず。柳は翠のうるはしきをめでて、花の榮なきをいとはず。櫻は花のめでたきを玩でて、實の數ならぬをいはず。世の中の人も一かたよければ、一かたあしく、取り所あれば捨つる所もあるものにて、よろづ具足はりて能き人は、むかしも今も有り難かることわりなるを、世の人の、人を見るにはまづそのあしき所よりもとめ出でて、そのよき所を賞でざるが多かるは、かの梅の枝ぶりのつきなきをきらひて、香のあはれをいはぬ人の如くになんありける。

『待問雜記』

二三　模範國民の養成　その一

高田早苗（講演）

高田早苗
法學博士
前早稲田大學總長
貴族院議員
東京の人
萬延元年生

主權、領土、人民の三要素

諸君。凡そ國家といふものが成立つには、是非とも主權、領土、人民の三要素を具備しなければならぬ、これが國家學上の原則である。さうして其の國が力ある國として認められるには、主權が確かりして居なければならないのは云ふ迄もないが、殊に大切なの

自修自敬

半峰學人

自修自敬

高田早苗 筆 蹟

は、國民の中堅たる中等社會が確かりして居る事で、國家の盛衰興亡は、一に、國民を率ゐて、その模範となるべき此の中等社會が、確かりして居るかどうかと云ふ事によつて定まると云つてもよいのである。

勿論、模範國民といつても、國や、時代を異にするに從つて、それ〴〵其の資格を異にするであらう。例へば、英國には英國の模範國民があり、獨逸には獨逸の模範國民があり、佛國には佛國の模範國民があり、日本には日本の模範國民があるべき筈であらう。又同じ日本の模範國民でも、平安朝時代には優美を本位とし、武家時代には武勇を本位とし、明治時代には進取集大成といふ事を本位とす

るといふやうな相違があるであらう。さすれば今後の模範國民にも、矢張それ相當の特質があるべき筈であるが、その特質が如何なるものであるべきか、それについて暫らく所見を述べて見たいと思ふのである。

扨これを說くには、まづ過去の日本と將來の日本とを比較して見る必要がある。比較といふよりは、寧ろ過去の時代、其の中でも特に明治時代の特長と、今後の特長とが、どういふ風に違ふべきかを考へて見る必要があると思ふが、是れは極めて簡單に言ひ表し得る事である。一體、明治年間と云ふものは、一にも二にも、明治天皇の御高德御宏業によつて充たされて居た時代である。明治天皇の御德の洪大無邊なる事については、崩御當時內外のあらゆる新聞雜誌が、あらん限りの言葉を盡くして讃美し奉つたので、今更蛇足を添へる必要はないが、私は其の中でも特に仰讃し奉り、御禮

明治年間といふものは、一にも二にも、明治天皇の御高德御宏業によつて充たされて居た時代である。

自分免許の名稱

を申上げねばならない二つの大きな御事業があると思ふ。

其の一つは、陛下の御治世の間に國權が伸び、國威が振張した事である。小さな日本が大きな日本になつた事である。日本人は昔から、「大日本」と云つて居たが、これは自分免許の名稱で、事實は大日本どころか、外國では皆小日本扱ひをして居たのであつた。それが日清、日露、兩戰役の勝利によつて、實際に世界的な大日本となり、次いで朝鮮を併合し、滿洲を勢力範圍に入れて、益〻大日本としての貫目を加へて來たが、かやうな大きい事業は、皆明治大帝の御高德が外に對して發露した結果に外ならぬのである。

他の一つは日本が立憲國、法治國となつた事である。言ひかへれば、憲法が欽定せられ、之れに附屬した諸法律が整へられて、日本が立派な立憲國、法治國になつた事で、是れは要するに、陛下の御高德が內に發した結果である。

權利などは藥にしたくも持つてゐなかつた。

此の、日本が立憲國となり、吾々が立憲國の國民となつたと云ふ事は、實に大變な出來事である。言ひ現はし樣もない有難い事である。明治天皇の御治世までは、武士は斬捨御免の特權を持つてゐた。そして百姓は土百姓、町人は素町人と呼ばれて、當時の政治家であつた所謂武士からは、殆んど奴隸同樣に見られて居た。其の證據には、日本の一般國民は、勿論天子樣に對して臣とは稱して居たが、其の實直接の御家來にはなれずして、將軍の臣僕であつたのである。將軍に對して臣僕と云ふのは、まだ我慢も出來るが、多くは其の臣僕の臣僕となつてゐたのである。臣僕と云へばまだ多少人間らしく聞こえるが、實は全然犬猫扱ひにされて、權利などと云ふものは、藥にしたくも持つてゐなかつたのである。早い話が、彼等がもし國家の爲めに意見を立てるか、建白でもしようものなら、土百姓、素町人の分際で不都合千萬だと云ふので、直ちに縛り

上げられて了つたではないか。百姓町人ばかりではない、たとひ武士でも、政治の局に當たつて居ない者が建白沙汰に及ぶと、政治向に喙を容れたといふので、揚屋入を申付けられたり、殺されたりしたではないか。林子平がさうである、蒲生君平がさうである、吉田松陰、佐久間象山、皆さうであつた。若し强ひて國を憂へて彼れ是れいへば、酷い目に遇ふと云ふ有樣だから、多數の者は、さういふ事には關係せずに、おとなしく租稅だけを納めて居ようといふ樣な、哀れはかない境遇にあつたのを、明治天皇が、四民平等といふ事で、天子樣の直接の臣民にして下さつたのみならず、尙ほ其の上に憲法と云ふものを御欽定になつて、立派な權利を御授け下さつたのである。しかも、生命財產の安全、信教の自由と云ふ樣な私權のみならず、國家の政治にも喙を入れ得るやうに、代表者を出して、陛下の御施政の御相談相手たらしめられる公權まで御授けになつて、我々を人格ある國民として下さつたのである。

明治天皇は憲法と云ふものを御欽定になつて、立派な權利を御授け下さつた。

陛下はまた日本を立憲國にして下さつたばかりでなく、更に進んで法治國にして下さつた。日本といふ國家は、人間が治めるのではなく、法が治めるのである。無論其の運用は人間がするのであるが、とにかく帝國憲法、其の他の諸法律があつて立派に治めるといふ、キチンと整頓した國にして下さつたのである。法で治められる國は煉瓦又はコンクリートで出來た建物のやうなもので、基礎が鞏固であるから、其の主權者の身の上に變化があつても、國家が何等の影響をも蒙ることがない。明治大帝崩御の後に於いても、日本の國運が益〻伸暢して居るのは、一つは法治國たる御蔭である。斯樣に我が日本のために萬代不易の地盤を固めて下さつたのは誰方であるか、云ふ迄もなく、明治天皇である。明治天皇の如き偉大なる帝王は、世界始まつて以來、外には全く無いので、歷山

陛下は日本を立憲國にして下すつたばかりでなく、更に進んで法治國にして下さつた。

Concrete

Aexander the Great
マケドニア王
(356–323B.C.)

大帝や、ナポレオンや、フレデリック大王や、其の他史上に有名な主權者でも、之れを明治大帝と比較すると、先づ月の前の星位なものになるのである。

明治天皇は、また、日本を憲法國、法治國として下されたばかりでなく、御自身御みづからが世界に稀れなる立憲的君主であらせられた。私は第一議會以來帝國議會の一員として、常に拜し奉つた事であるが、天皇が御自分憲法を發布遊ばされて、其の旨を皇祖皇宗の御靈に御告げになり、其の上、朕及ヒ朕カ子孫ハ將來此憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行フコトヲ愆ラサルヘシ」と宣はせられて以來、未だ嘗て少しも非立憲的の行爲を遊ばした事がない。かやうに類ひ稀れなる御德と御行爲とがあつたればこそ、明治時代といふ大御代が現出したのであると、私は思ふ。

とにかく明治時代は大帝の御威德によつて前古無比の發達を

Napoleon Bonaparte フランス皇帝 (1769-1821)

Friedrich der Grose プロシヤ王 (1657-1713)

明治天皇は、御自身御みづからが世界に稀れなる立憲的君主であらせられた。

遂げた時代であるが、しかし、此の時代に於ける國家の地位の向上、憲政の樹立に依つて、國家の基礎が大磐石になつたかと云ふと、さうではない。吾々が若し、內にあつては立憲國、法治國といふ外形が整ひ、外に對しては武力で戰爭に勝つたから、もうこれで澤山と思ふならば、それは大間違である。何故かといふに、戰爭に勝つても勝ちつ放しで拋つて置いてはならぬ。立憲國、法治國の外形は出來ても、內容の美が之れに伴はなければ、何にもならぬ。これから吾々の實力で戰勝の後を固め、立憲國、法治國の外形に伴ふ內容の美を濟さなければならないが、これはなか〳〵困難な仕事である。殊に困難なのは、憲政有終の美を濟す事である。即ち、吾々は明治大帝が端緒をお開き下さつた其の事業を引き繼いで、上下一致してこれを整へて行かなければならないので、この完成の仕事を爲し得る人間が、今後の模範國民である、一般國民を率ゐて立つ

吾々の實力で戰勝の後を固め、立憲國、法治國の外形に伴ふ內容の美を濟さなければならぬ。

吾々は明治大帝が端緒をお開き下さつた其の事業を引き繼いで、上下一致してこれを整へて行かなければな

らないので、この完成の仕事を爲し得る人間が、今後の模範國民である。

事の出來る人間であると、私は思ふ。

二四　模範國民の養成　その二

高田早苗（講演）

扨また世界に於ける我が國今日の狀態はどうかと云ふと、譬へて云へば、今迄横丁に店を開いて居た商店が、角店を張る樣になつたやうなものである。ところが、其の角店は、なか〳〵立派であるが、角店相當の資本があるか、商品があるかと云ふと、まだなか〳〵で、加之一面には角店不相應の借金があると云ふ、これが我が國現在の有樣である。で、此のまゝでは困る。苟且にも角店を張つた以上は立派に張り通さなければならぬ。それには張り通すだけの實力を充實せしめなければならぬ。それで、どうしたら其の實力を充實せしめ得るかと、一生懸命苦心して居るのが、現在の日本

廣く眼を放つて、世界的に殖産興業の仕事をする、利用厚生の途を講ずる、通商に貿易に、世界的活動をするといふ事より外に、一等國の地位を永遠に保たしめる途はないのである。

世界的活動の二つの流儀

商賣は國旗に從ふ。

國旗は商賣に從ふ。

の有樣なのである。

所で、其の實力を充實せしめるには云ふ迄もなく世界を相手にして世界的活動をしなくてはいけない。廣く眼を放つて、世界的に殖産興業の仕事をする、利用厚生の途を講ずる、通商に、貿易に、世界的活動をすると云ふ事より外に、我が一等國の地位を永遠に保たしめる途はないのである。併し、これが中々容易な事ではない。それには先づ世界的活動の方針を立てなければならぬ。

歴史の示す所によると、從來行はれた世界的活動の遣り方に、二通りあるやうに見える。一は「商賣は國旗に從ふ」(Trade follows flag)と云ふ流儀である。他の一は「國旗は商賣に從ふ」(Flag follows trade)と云ふ流儀である。前者は國旗を先きに立てゝ、それを目標として商賣をする、卽ち貿易が國旗の御供をして行くので、今迄の日本の遣り方がそれであつた。革命前の露西亞や大戰前の獨逸の遣

り方もそれであつた。しかし此の遣り方は餘り善い遣り方ではない。この遣口で行くと、自然軍備擴張が必要になつて、面倒が起こつて來るが、之れに代はるべきものが第二の遣り方で、それは前とは反對に、貿易が先きに立つて國旗が後から尾いて行くといふのである。

然らば、貿易が先きに立つて國旗が後に尾いて行くと云ふ遣り方の先例が、何處にあるかといふと、現に我々の同盟國であつた英國が長くそれをやつて居る。印度が英國の領地である事は誰れも知つて居るが、それは此の遣り方によつた結果で、もう一つ最近の著明な一例は、南阿弗利加に於けるトランスヴールである。トランスヴールの戰爭は如何にして起こつたかといふに、南阿弗利加に金剛石が出る、金が出るといふので、英國人が掘りに行つた。和蘭人も行つた。そして彼等は金剛石や金を掘りながら、片手間

State of Transvaal 英領アフリカ聯邦、世界第一の金産地

に植民地の經營をやつてゐた。而して英吉利は南阿弗利加に植民地として喜望峰植民地、ナタール、ローデシヤなどと云ふ日本の何層倍もある植民地を作つたのである。和蘭人も亦例のトランスヴール及びオレンヂ自由國と云ふ、立派な二つの共和國を作つた。所が英吉利の金剛石掘にセシル、ローヅと云ふ名高い人が居つた。此の人は、英吉利人が、時計や軍艦や大砲を製造する者はどこにも居るが、俺の國にはセシル、ローヅといふ帝國製造人（Empire maker）が居ると云つて、自慢にして居る其の人で、此の大豪傑が、南阿弗利加で金剛石を掘つて居る傍ら、ローデシヤといふ植民地を建設した。さうして或る時、鞄を提げて英吉利本國へぶらりとやつて來て、トランスヴール、オレンヂ自由國を併合する獻策をして、時の政府を動かした結果、ロバーツ元帥が總指揮官となり、先年來朝したキッチナー元帥が參謀總長となつて、大いに戰つて、遂に和

State of Natal Rhodesia 共にアフリカ洲南部の英領

Orange Free State 南アフリカ聯邦の中部

Cecil Rhodes (1853-1902)

Frederick Sleigh Roberts, Earl (1832-1914)

Horatio Herbert Kitchener, Earl (1850-1916)

蘭植民地のオレンジ自由國とトランスヴール共和國とを併せて、總て之れを英國の領土とする事になつた。是れが卽ち貿易に尾いて國旗が行つたのである。斯くして英國には太陽が沒することのない廣大な領土が出來たのである。

以上は我が舊同盟國たる英吉利の仕事であるが、今後の青年が世界的活動をやるならば、もとの獨逸や、露西亞の眞似をするよりも、英吉利の流儀がよくはなからうかと思ふ。尤も今頃になつて出掛けるのでは、世界中を鐵の草鞋で探し歩いて見た所で、帝國などの落ちて居る氣遣ひはないが、土地ばかり取りたがるのは幼稚で、要するに實利實益を計らなければ何にもならぬ。商賣的に發達し、貿易的に發展して、國が金持になり力を充實させさへすれば、領土は狹くとも差支ない。況んや今日我が領土は相當に廣く、是れだけあれば國民が活動すべき地盤は先づ充分で、あとは通商的

世界中を鐵の草鞋で探し歩いて見た所で、帝國などの落ちて居る氣遣ひはない。

に貿易的に、世界に活動して發展すればよいのである。これが今後の日本が採るべき對外發展の大方針であると私は思ふ。

元來主義とか方針とか云ふものは一つでもよいが、二つあれば尙更結構である。屏風でも畫幅でも一双とか二幅對とか云ふが、眼なども二つあるのは、一つを以て外を睨んだなら、もう一つの方で內を顧みなければならないからであらう。昔から外ばかりに目を着けて內を見る事を忘れた爲め、外にばかり力が伸び過ぎて、國家の基礎が危くなつて瓦解したと云ふ例は、古今に通じて枚擧に遑がない程多くある。だから國家としては、どうしても外に眼を着けて働くと同時に、一面には能く內を固めて行くやうにつとめなければならないのであるが、それならば如何にして內を固めて行くか、國家の基礎をば如何にして安全にするかと云ふと、前に述べた明治天皇の二大御事業の一つである憲政の樹立と云ふ大

憲政有終の美を濟すことによつて國家を泰山の安きに置くのが新しい意味の眞の忠君愛國である。

この新しい意味の忠君愛國たる憲政樹立の努力と對外の平和的發展と、此の二つの道を立派に辿つて行く事の出來る人間が卽ち私の所謂今後の模範國民である。

旨意に基いて、憲政有終の美を濟すと云ふ事の外はないのである。そしてこれによつて國家を泰山の安きに置くのが、新しい意味の眞の忠君愛國なのである。そして、この新らしい意味の忠君愛國たる憲政樹立の努力と對外の平和的發展と、此の二つの道を立派に辿つて行く事の出來る人間が、卽ち私の所謂今後の模範國民であるのである。要するに、私は今後の青年は、對外觀念の發達と立憲思想の普及と、此の二つの事業に努力の焦點を置かなければならないと固く信ずるのである。

純正國語讀本　卷九　終

昭和四年八月十七日印刷
昭和四年八月十日發行
昭和四年十二月六日訂正再版印刷
昭和四年十二月九日訂正再版發行
昭和七年十月十五日訂正三版印刷
昭和七年十月十八日訂正三版發行
昭和八年二月十四日訂正四版印刷
昭和八年二月十七日訂正四版發行

（新制版）
純正國語讀本　卷九
定價金六十錢

不許複製

編纂者　五十嵐力
發行者　東京市淀橋區戸塚町一丁目五十八番地　早稲田大學出版部　代表者　武田尾吉
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　五十嵐良晃
發行所　東京・早稲田　早稲田大學出版部　電話牛込三四五番・三四六番
日清印刷株式會社印刷